

一幕 (プロローグ) 信州諏訪湖

時は文政十二年。ところは信州諏訪湖。雷、雨が激しくなる。逃げ惑う村人たち。空は曇り、雨風が吹き荒れる。村人たち、土嚢を運び諏訪湖の満水に備える。しかし、その努力も空しく、湖は荒れ狂い、村人を襲う。  
(ステージング①)

song1

♪諏訪の湖は 誰も手に負えない  
すべて うばいさる 水のあばれ龍

平汰

おい、諏訪湖が満水になった。水が溢れるぞ！

土のうを積んでいる集団。逃げまどう人々。けたたましく鳴る半鐘。

文治

土のうだ！土のうをもっと持ってこい。

荷車を押す集団。山のような荷物を積んでいる。途中、輪がくぼみにはまり。

熊

せえの（力を入れる）せえの。（抜けられない）ダメだ。

平汰

おい！堰が切れた。あきらめて逃げろ！

皆逃げ出す。よく見ると逃げ出せず、うずくまる者、力尽きて倒れ込む者が数人いる。助けを求めるが誰も聞く耳をもたない。そこに五六郎があらわれ、逃げ遅れた人々を助けたそうとする。一人二人は抱えられるがそれ以上はムリ。置きさられた荷車を見付け荷物を全部放り出し、逃げ遅れた人々を荷車に。

一人で荷車を懸命に引っ張る五六郎。そこに村人たちが引き返して皆でそれを助ける。

♪どうすればいい この諏訪を どうすればいい この湖を  
(コーラス) 負えないぞ 諏訪の龍神は  
♪どうすればいい この諏訪を どうすればいい この湖を  
(コーラス) 手に負えないぞ 諏訪の龍神は

すべて助け出した五六郎。諏訪の海を見つめ、決心を固める。

場面転換



五六郎 ああ、ご家老さまのことでしたか？  
鬼頭 しっ、しまった。  
五六郎 この五六郎。生涯の大仕事としてやらせてもらいてえんで。  
鬼頭 ダメだ！そんな許可は出せん。

その時、奥の方から一人の武将がやってくる。彼こそ高島城第9代藩主 諏訪忠誠。現在は若殿。

忠誠 よいではないか、その者にそれ程の費用を与えよ。  
鬼頭 しかし、若殿。

五六郎 若殿？（ひれ伏す）ははあ。（若殿のいる間は頭をあげない。だから顔はわからない）

忠誠 諏訪の百姓あつての我が藩だ。  
五六郎 物分かりのいい若殿さんだ。

鬼頭 これ！口をつつしめ！  
五六郎 へへい。

忠誠 ところで、おぬし、五六郎とか申したな。  
五六郎 へい。

忠誠 その位のでかい舟をつくるなら、島を削るなんてケチなことじゃないで、丸々島をなくしてしまつたらどうだ。

五六郎 しっ、島ごとですか？  
鬼頭 若殿！何をおっしゃいますか！

忠誠 できぬか？  
五六郎 そりやおもしろえ。それをやらせてもらえば、バンバンザイですあ。

忠誠 やつてくれるか。五六郎。  
五六郎 もちろん。

鬼頭 それでは、そちに浜中島撤去と大型船の許可を与える。  
五六郎 えっ！

鬼頭 おまかせください！この五六郎、命に代えて！  
忠誠 若殿、お待ちください。このような不埒者を信用されては、

忠誠 不埒者だからこそ（五六郎を見る）できることもある。

鬼頭 しかし・・・。  
忠誠 五六郎、ワシからも頼む。この諏訪を救ってみよ。  
五六郎 へい。（頭を下げる）

忠誠、去って行く。頭を下げる鬼頭と五六郎。

五六郎 浜中島の撤去か。へへ、こりゃいいや。

腕を振り上げて。

五六郎 おもしろえことになって来やがった！

プロモーション（役者、スタッフ紹介）

一幕（二場） 浜中島

ここは浜中島。弁天さまの昇神儀式を行うために、弁天さまを綺麗にしているオヨネと熊。村人の姿も見える。ここに集まっている村人はすべて五六郎派。工事の開始を今か今かと待ちわびている。祭っぽいサウンドで。（ステージング②）

song2

♪さてはめでたや さてはめでたや

諏訪の湖の一大事 浜中島は消えまする

五六郎は よいさよいさ 諏訪のあらくれ  
島をなくして 水の流れを良くしてみせる

♪さてはめでたや さてはめでたや

二升五合いただけ 飢えた百姓集まって

反対岸は よいさよいさ 新田が生まれる  
大きな船で 諏訪湖に実りの春が来る

浜中島の前。村人の熊、オキヨ夫婦。そこに訳あって預けられているお悠が楽しそうに昇神儀式の始まるのを待っている。後に村人がぞくぞくと集まってくる。

さあ、準備できたよ。

オヨネ オしはこんな島、なくなつてせいせいするがな。

熊 オヨネ でも、あたしら、この島に住んでたもんにとっちゃ災難だよ。何言つてんだ。それで、4軒分の敷地が下浜の橋爪に替え地していただけたんだ。ちったあ感謝しねえかい。

オヨネ これで、大水がなくなるっていうならしかたないね。

熊 オヨネ 五六郎ならやつてくれるよ。

ああ。

少し涙ぐむ熊とオヨネ。始めお悠（8歳）は弁天さまのホコラ辺りにいたが、そのうち、儀式を待つて座っているオキヨ（下諏訪宿の芸者さん）の元へ。お悠、オキヨからなにやら浮世絵らしいものを貰って喜んでる。そこに、一人の侍。粋な着流し、腰には一本刀でやって来る。

オキヨ 信さん、こっちこっち。

信さん おお、オキヨ。

信さんこと（諏訪忠誠）は、度々お忍びでこの界隈をふらつては、村人たちの良き相談相手になっている。姿見も良く、女性たちから絶大な人気を誇る。もちろん、村人たちは信さんが諏訪藩の若殿さまだとは思ってもいない。

オキヨ 場所とつてあるんだよ。ここ、ここ。早くしないと昇神儀式が始まっちゃうよ。

信さん わかった、わかった。そうせかすな。

オキヨ 信さんはいつ見てもいい男だねえ。

オキヨ、具合でも悪いのかい。口が半開きだよ。

うるさいね。あっちへ行つといでよ。

信さん、女の子を見つけて。

信さん 一緒にいいか。

お悠 うん。（懐から紙を出して）これ、おじさんに似てるね。

信さん 市川団十郎かい？おい、本当か。

お悠 うん。

信さん どうか？（団十郎の顔をマネする）

お悠 ほら、そっくり。

二人 はははは。

信さんとお悠、仲良くおしゃべり。

オヨネ こうしてみると、信さんとお悠ちゃん、何だか親子みたいだね。顔立ちもよく似てるし。

熊 何いってんだ。信さんはただの遊び人だよ。

オヨネ そこがまた魅力的なんだよね。

熊 女つてのはどうしてそういうのに弱いかね。

オヨネ なんだのお前さん、焼いてるのかい？

熊 バカ言つな。何でオシがおめえなんかに焼きもち焼くんてえ。

オヨネ 何だよ、顔真っ赤にして。ほら、仰いでやるよ、ホラホラホラ。

熊 やめる！てめえ、亭主からかって何がおもしれえんだ。

オヨネ ははははは。(山伏に気がついて) あんた、始まるよ。

熊 おお。

熊とオヨネ、場所を探して座る。三山講の山伏。神妙に入ってくる。と、その後五六郎と妻のシズもついて来る。

熊 おいおい、見るよ五六郎の神妙な顔。諏訪の荒くれが、あれじゃ壊れたカラクリ人形だ。

オキヨ ほんとうだ。おシズさんも恥ずかしくて下向いちゃってるよ。

信さん あれが、熊五郎の嫁さんか。

五六郎 だれが熊五郎だ！オシは五六郎だ。

山伏1 しっ！

五六郎 す、すまねえ。

山伏 うえい！「オン ソラソバテイエイ ソワカ」 「オン ソラソバテイエイ ソワカ」うえい！

山伏2 みなさん、起立をお願いします。

山伏1 きりくつ

山伏2 れい。

シズ 着席！

山伏たち すわるな！

山伏 おいおいと五六郎。わりわりいとシズ。

山伏 それではこれから、浜中島撤去に際し、弁財天の昇神の儀式をとり行います。すなわち一度神さまを神の国にお返して、いなくなつたスキを見計らつて弁財天をお移しすると、そういうこととごさいます。無事、お移しいたしました。瞬には、降神儀式をとり行い。新しい場所でお祀りすると、まあ、そういった感じですよ。わかりましたか？

皆 へっ？

山伏たち おわかりか！

皆 ……はい。

山伏 よし！

山伏1 きをつけくつ

山伏2 れい。

シズ 着席！

山伏たち すわるな！

五六郎シズに何を言ってるんだと注意。はいはいとお茶目なシズ。落ち着いたところで。

山伏 うえい！「オン ソラソバテイエイ ソワカ」 「オン ソラソバテイエイ ソワカ」

山伏 浜中島撤去により、ご本体のご移動を御願いたてまつります。願わくば、ご本体から昇神されたく、また、私めに美しい妻などめとらさせていただければ、これ幸いなどと申しながら、贅沢とは存じますが上から90・50・85なんて感じてぼんきゅうぽんと…。(せき払い)

山伏 諏訪の民一同。心より御願ひ奉ります。うえい！

山伏、お祓いをする、天を見上げて。  
 山伏 オフ！・・・イッた。  
 山伏1 きよつけっ！  
 山伏2 れい。  
 シズ ……。(今度は黙っている)  
 五六郎 えっ？  
 シズ ん？  
 五六郎 よし！工事の開始だ。おい、熊、頼んだ大舟はどうなってる？  
 熊 おお、すぐに平汰と文治が舟に乗ってここまで来るはずだ。  
 五六郎 オキヨさんにオヨネさん。人足の腹を朝昼晩と面倒を見てもらわなきゃならねえ。頼んだぞ。  
 オキヨ 腕のいい飯炊きを三十人ばかり揃えてあるからね。  
 オヨネ あんまり旨いからって腰抜かすなよ。  
 山伏 わしは、それだけが楽しみなんじゃよ。  
 シズ ちゃんと働かねえと、食わせないからね。  
 山伏 おっかねえな、おめえ！  
 五六郎 おっかねえとは何だ。オシの女房だぞ！  
 熊 五六郎の女房だから、おっかねえんだよ。  
 五六郎 まあ、オシもそうだけだよ。  
 シズ なんだって、あんた！  
 五六郎 ……すっすいません。  
 皆 あははははは。  
 シズ ……もう！  
 山伏 わしらも力を合せば、この嫁御にも負けはせん。  
 シズ ほう。  
 五六郎 そうか、三山講の衆もやってくれるか。  
 山伏 当たり前じゃ。我が三山講衆、八百(その日の集客数)の荒くれを引き連れて、もうそこまで来ておるわ。んじゃ、ちよっと呼んでみようかな。せえの！  
 山伏1・2 おおい！山伏の衆！(客席に)

客席 ……  
 山伏 (コケて客席に) あ、すいません。かわいい子供たちが「おおい！山伏の衆」と呼んでいるんで、「おお！」とか返してもらえないでしようかね。だめですよ、これは参加型のお芝居なんです。ぼろっとしてちゃ。困りますよ。んじゃこの子たちが「おおい！山伏の衆」ってもう一回いいますから「おお」って言うてくださいね。はい、それじゃ、一回練習してみましよう。いいですか。行きますよ。「おおい！山伏の衆！」  
 客席 ……おお。  
 山伏 あれえええええええええ、元気がないなあ。ちよっと頼みますよ。これじゃ子供たちもがっかりですから。がっかりだよな。  
 山伏1・2 うん。  
 山伏 ほらあ、いいですか？もう一度お願いしますね。はい、ちよっと足なんか肩幅にひらいてください。いいですか。下っ腹に力を入れて「おおい！山伏の衆！」  
 客席 おお！(客席の人々が「おお！」と言うまでやってください)  
 山伏 なんだ、やればできるじゃないですか。もう、最初からやってくださいよ。はい、それじゃ、今度は本番！子供たちが言いますからね。よろしくお願いしますね。それじゃ返しますよ。せえの！  
 山伏1・2 「おおい！山伏の衆！」  
 客席 おお！  
 山伏 (拍手) はい、ありがとうございます。座っていいですよ。(芝居に戻って) ほらね。たくさん山伏の衆がいるでしょ？  
 五六郎 ……おお、いたな。始めはびっくりしたけどな。いたいた。  
 皆 ははははは、良かった良かった。  
 少し離れたところに女が3人。(下花道)  
 お梶 あいつら何あそんでんだ？  
 オサト 何だか楽しそうだな。(そっちへ行くことする)  
 オセツ オサト！見つかっちゃうだろ。

オサト ごめん、ごめん。  
お梶 でも、可笑しいよな。あのホコラの弁天さまはここにあるのにな。

三人で弁天さまを見る。

オサト あたいたちが盗んだの気がついてないんだね。  
オセツ バシたらやばいよ。早く行こう！

お梶 わかっているって。だけど、あれ何やってんだ？

オサト 弁天さんを一度、神の国にもどすって言ってたよ。精進料理？

オセツ 昇神儀式！

オサト ああ、それぞれ。

お梶 じゃあ、弁天さんが、弁天さんじゃなくなるってことか。

オセツ あそこで、ちゃんと昇神儀式をやっていけば、この弁天さまは抜け

殻ってことだな。

お梶 じゃあ、ここにいたらどうなる？（弁天様を見る）

オサト・オセツ 抜け殻・・・じゃないよね。

そこに、大きな舟が浜中島の横に接岸される。その頭から平汰と文治（二人は大工）。

平汰 おおい、五六郎、舟ができたぞ！ばかやろう。

文治 おめえの頼みだ。9艘のでっかい舟、寝ずに作ったんだ。感謝しろ

よ！このクソツタし。

信さん おお、これなら、泥を積んで向こう岸までいけるぞ。

シズ おったまげたねえ。あたしや、こんなでかい舟初めて見たよ。しか

もこんなに沢山。

五六郎 熊！人足は集まっているか。

熊 あたりめえじゃねえか、千人くらいは集まっているよ。

山伏 千人じゃない！千人プラス八百（その日の集客数）で千八百だ。

なあ！（再び客席に）

客席 ……おお。（気後れして少なくなってる）

五六郎 ちよっと減ったな。

山伏 ううううう。

シズ まあまあ、みんな空きつ腹をかかえて、うずうずしてるんだよ。

五六郎 それじゃあ、まず、飯か？

シズ そうかも知れないねえ。

五六郎 よし、握り飯だ。ありったけ持って来い！

オヨネ・オキヨ あいよ！

おおいに盛り上がる村人。山伏たち弁天さまのホコラを片づけようとして。

山伏 おおおおおおおつふ！

五六郎 どうした。

山伏 弁天さまがいらっしやらねえ。

皆 なに？

オヨネ 最初っから？

山伏 そうみたい。

五六郎 盗まれたのか？

山伏 それとも消えたのか？

熊 もっと早く気づけよ。

五六郎 おめえだろう、準備したの。

山伏 おい、あいつら怪しくねえか。

女たち ビクッ！

山伏 待て！その女たち！身体検査をする、全員そこで裸になって、三

べん回ってワンと言え！

お梶 やなこった。このスケベじい。だれがそんなことを・・・。

オサト ワン！

お梶・オセツ やるなよ！

山伏 ふふふ、かかったな！あいつらが犯人だ！

お梶  
女たち  
おい、逃げるよ。  
おお！

その時、大騒ぎをしている人々から抜け出て来たお悠（8歳）がその女たちに呼びかける。

お悠  
ねえちゃん！

その呼びかけに立ち止まって反応するお梶。

お梶  
えっ？

お梶、振り向く。

お悠  
ねえちゃんだろ？あたいだよ。お悠だよ。

お悠  
お悠？

お悠  
ねえちゃん、今までどこにいたんだよ。

お悠  
おい、いくぞ！

お梶  
……ああ。

女たち行ってしまう。

お悠  
ねえちゃん、ねえちゃん。（追っかける）

お悠  
お悠ちゃん。

お悠  
あんた！

お悠  
おお！

熊とお悠は熊の後を追う。その後を山伏たちや村人も追って行く。（待てええ！）

五六郎  
やっぱりどこにもねえな。最初っから……（後ろを振り返って）  
誰もいねえっ！

信さん  
おお、みんなどこかに行っちゃったぞ。  
なんだと！

五六郎、周りを見るが信さんだけしかない。

信さん  
とんだ船出になったなあ。

五六郎  
へっ、なあに、また集まってくるさ。この舟を見りゃ、誰だって希望が沸き上がってくる。

信さん  
確かに立派な舟だ。

五六郎、信さんの顔をまじまじと見て。

五六郎  
それより、あんた誰だ？

信さん  
俺か？

五六郎  
ああ。見かけねえ顔だな。

信さん  
……人からは、遊び人の信さんって呼ばれてるけど。

五六郎  
そうか！おめえも人足になりてえのか。

信さん  
いや、俺は……。

五六郎  
遊んでばかりじゃ生きちゃ行かねえぞ。働け。

信さん  
……ああ。しかし……。

五六郎、信さんを抱きしめて。  
よし！心配するな。よしよし。ううん。かわいい、かわいい。  
……まいったな。

五六郎、諏訪湖を見つめて真剣な眼差し。  
おめえにも白いまんまを食わしてやる。腹いっぱい食わしてやるか

らな。

五六郎、諏訪湖の空を眩しく仰ぐ。その姿を見て。

信さん よろしく頼む！五六郎。

信さん、五六郎後ろ姿を頼もしく見つめる。

一幕（三場） 下諏訪宿の茶屋

苦虫をかみつぶす鬼頭。風呂上りなのか頭には手ぬぐい、浴衣姿。そこに成金屋五郎（下諏訪宿の商人）現れて。お膳とお酒。ここは下諏訪宿の行きつけの茶屋。

成金屋 それは、面倒なことになりましたな。

鬼頭 良いではないか、このまま見過ごそう。

成金屋 それではあの男に浜中島の撤去をさせるおつもりですか？

鬼頭 そんな馬鹿げた工事がうまくいくハズがない。

成金屋 なるほど、わざとやらせておいて、諏訪氏の評判を地に落とすと。

鬼頭 その通りじゃ成金屋。どうじゃ、頭が良からう。はははは。

成金屋 ははは、いやいやおみそれいたしました。

鬼頭 まったく、さきごろも藩の財政が切迫しておるというのに、斜面に桑

を植えさせ、養蚕に力を入れるとバカなことを始めおった。

成金屋 それはまた愚かなことを。諏訪には天下の下諏訪宿があるではありませんか。

鬼頭 まったくじゃ。蛾の幼虫ごときに藩の財政を救えるか！のう。

成金屋 ごもつとで！

鬼頭 しかも此度は島をなくすか。本丸の諏訪家は藩主のうつわにあらず。

時期藩主はこの二の丸家がふさわしい。高島城はこのわしのものだ。

成金屋 よい機会かも知れせん。

鬼頭 村中に不穏な空気を流せ。浜中島をなくすと諏訪神のイカリに触れる

とな。怯えさせて、浜中島に近づけさせるな。

成金屋 わかりました。

鬼頭 成金屋。ワシが藩主になった暁にはおまえを鼻屑にしてやる。下諏訪

宿はお主がしきれ。

成金屋 ありがたきしあわせ。それではさっそく手を打ちましょう。

鬼頭 白猫！

怪しい気配の浪人が現れる。

白描 はっ。

鬼頭 人ぎらいの変わり者だ。成金屋、好きに使うがよい。

成金屋 しかし、ご家老。わたしはこの者が少々苦手でして。

鬼頭 そう嫌うな。この者、金の為なら何でもする。重宝するぞ。

成金屋 ……はい。ご家老の仰せとあれば。

成金屋、白描ハケル。

鬼頭 五六郎め。調子に乗りおって。今に思いしらせてやる。

一幕（四場）村はずれ

二人の旅人、一人は葛飾北斎 もう一人は、弟子の為一。

為一 北斎先生、ほんとうにこっちの方でいいんですか？

北斎 大丈夫じゃよ。信州の諏訪湖のことは良く知っておる。特に釜口の弁天島と浜中島は名所中の名所だからな。

為一 わかりました。先生を信じます。

そこにさつき、お梶を追って行ったお悠（8歳）がしょんぼりと通りかかって。

北斎 おい、小嬢。諏訪湖の釜口にはどう行けばいい。

為一 やっぱ迷ってんじゃねえか！

お悠、ニコツと微笑むと突然走り出す。

北斎 おい。どこへ行く。

お悠、高台に立って。

お悠 弁天島と浜中島だな。それならあそこだ。

北斎と為一、そこに行き一緒に見る。

北斎 おお。

為一 先生、すぐそこでしたね。

北斎 やっぱりな。

為一 本当ですか？

お悠 あんたたち、そこに何しに行くんだ？

北斎 ちよっと絵を描きに来たんじゃ。

お悠 へえ、すごいな。絵描きさんなの？おじいちゃん。

北斎 わしは、おじいちゃんではない。葛飾北斎じゃ。

為一、拍手などしておおいに盛り上げる。

お悠  
へえ。

為一、知らない？江戸ではけっこう、有名な浮世絵師なんだけどなあ。

お悠  
歌川国貞なら知ってるよ。ほら（市川団十郎の絵をみせる）えっ！

為一  
あああ、お嬢ちゃん。もついいよありがとう。  
まったくかわいい顔して田舎者はこれだからこまる。

北斎  
北斎を慰める為一。それには目もくねず、お悠は諏訪湖を見つめる。

お悠  
あそこは昔、島じゃなくて、地続きの荒地だったんだって。大きな堀を作って諏訪湖の水はけをよくするうちに、できた島なんだって。

かあさまから聞いたんだ。  
ほほっ。

為一  
ほほうって、先生、何んにも知らないんじゃないですか。  
いやちがう。堀を作ったのは高島城の築城の折りじゃ。この辺の百姓が知ってることじゃない。

北斎  
そうか・・・おまえのおつかさんは物知りだね。  
・・・。

為一  
お守りをじっと見るお悠。

お悠  
かあさまは、一昨年の大水で死んだんだ。  
それはかわいそうなことをしたな。

北斎  
ねえちゃんも、あれからずっと行方しれずで・・・あの人、ねえちゃんじゃなかったのかな。

お悠  
お悠、今来た道を振り返って、見失った少女を思い出す。

為一  
ここは大変なところなんだなあ。  
ああ、諏訪は大水の多いところだな。百姓は大変な苦勞をしていると聞く。

お悠  
でも、五六郎が釜口を切り広めてくれるって。  
五六郎？

北斎  
浜中島を削り取って水はけをよくしてくれるって。それで、島がなくなっちゃうのは寂しいけど・・・。

お悠  
そこに熊とオヨネ、お悠を迎えに来てくれた。

熊  
お悠。  
帰る。お悠ちゃん。

オヨネ  
うん。いい絵を描いてね。おじいちゃん。  
ワシはおじいちゃんでは・・・。

お悠  
熊とオヨネも会釈。三人行ってしまっ。

為一  
どうやらあの子、あの人たちに養ってもらってるみたいですね。  
さあ、行こうか。名だたる名所はすぐそこじゃ。

北斎  
でも先生。さっきの子が、島がなくなると・・・。  
ああ、水はけを良くすると言ってたな・・・。（バシッと為一を殴る）

為一  
（ばか者！  
うげっ！

北斎  
島がなければ絵にならんぞ！  
そうですよ！

為一  
北斎走りだす。

北斎  
先生、どこへ行くんですか！  
五六郎という男を探す！工事をやめさせるんじゃない！

為一  
えっ、でも・・・。ちょっと先生、待ってくださいよ。

北斎  
先生、どこへ行くんですか！  
五六郎という男を探す！工事をやめさせるんじゃない！

為一  
えっ、でも・・・。ちょっと先生、待ってくださいよ。

一幕（五場）くぼったみ村

ここは、災害で家を失った者や田畑を流された者たちが、身を寄せ

song3

合って生き永らえてる小さな集落。（ステージング③）

♪風が鳴く 荒れ果てた野に  
病に倒れ 飢えて死ぬ  
この世の地獄 絶望の暗やみ

♪恵みを運ぶ 諏訪の海が  
すべてを持ち去る 跡形もなく  
嵐とともに、命までも。

♪ああ 諏訪の神よ われらに恵みを  
ああ 諏訪の龍神 われらに慈悲を

♪ああ 生きる希望 耕せる大地  
ああ 一粒の米を、与えたまえ。

力尽き、倒れる者、泣き伏す者、まさに生き地獄。そこに五六郎。  
あまりの惨状に、目を覆う。

五六郎 なんてありさまだ。おい、しっかりしろ。

村人1 五六郎、もう、俺たちはだめだ。

村人2 このままじゃ飢えて死ぬだけだ。

五六郎 あきらめるな。いいか良く聴け！諏訪藩から工事の許可が降りたんだ。

村人3 ……じゃあ浜中島を切り崩すっていう。

五六郎 ああ、それだけじゃねえ、島ごと削り取れとのご判断だ。

村人4 浜中島をまるごと？

村人1 そりゃ、途方もねえ工事だ。

五六郎 それだけの土を、この有賀、小和田の村に運んでみる。水にぬかって荒れ果てた土地はみんな田畑に生まれ変わる。

村人2 そんなこと本当にできるのか？  
 五六郎 できるさ。みんなで力を合せれば、必ずできる。  
 村人3 そりやすげえ。なあ。  
 村人4 ああ、そうすりゃあ田んぼに種がまける。  
 五六郎 そうだ、秋には黄金色の田んぼが生まれる。  
 村人2・3・4 ああ！  
 村人1は、五六郎、村人2、3、4の喜ぶ顔とはうらはらに、憂うつそうに沈む。五六郎それに気がついて。  
 五六郎 おい、どうした？  
 村人1 おらあ、なんだかおっかねえ。  
 五六郎 えっ？どうしてだ。  
 村人1 この辺の村は、浮浪者や乞食同然の連中が集まるゴミ溜めだ。そんなものの為に、浜中島を削り取るなんて言ったら、他の村のものは何て言うか。  
 村人2 そうだ。削り取った土で諏訪湖が濁りでもしたら、漁師連中は、ほっとかねえ。  
 村人3 それに、天竜川の川下の連中が黙っちゃいねえよ。  
 村人4 ああ、そうだ。  
 五六郎 そのために、もう何年も天竜川の川ざらいをしてきたんだ。おめえたちも作業に刈り出されたらどう。俺の測量じゃあ、今、天竜川には余裕がある。諏訪湖の水を天竜川に流し込んで大丈夫だ。そうすりゃあ、諏訪湖の水位も下がる。水害に耐える湖に生まれ変わるんだ。  
 村人、肩を落とし、また怯えながら五六郎を睨む。  
 村人2 それにあの浜中島の弁天さまの祟りがあるって……。  
 五六郎 祟り？なんだそりゃ。  
 村人3 そういふ噂だ。

村人4 オラそんなもんに関わりたくねえ。  
 村人たち ああ。  
 村人たち、「とんでもねえことだ」とか言いながら立ち去る。  
 五六郎 おい！俺を信じる。頼む、手を貸してくれ！……くそう、誰がそんな根も葉もねえ噂を……。  
 そのとき村の子供たちが、大声を出してやってくる。  
 子供1 おおい、こっちだぞ。  
 子供2 「すいとん」をくれるって本当か？  
 子供3 ああ、お梶たちが作ってくれたんだ。  
 子供4 上げええ、早く行こう。  
 女三人の村人が大きな釜に、煮込んだ「すいとん」を入れて、お椀や桶を持った人々に配っている。  
 五六郎、そっと影に隠れて見守る。  
 お梶 ほら、順番に並んで。  
 オセツ 割り込みはダメだぞ。  
 オサト あたいたちが作った「すいとん」だよ。カボチャもネギも入ってるから、よく暖まるよ。  
 お梶 おい、おめえ、さっきも来たじゃねえか。まあ、いいか、ほら、たくさん持ってけ。  
 オセツ はい、次。  
 お梶 おい、そんなにがっついていたら、咽を詰まらせちゃうぞ。ははは、そうか、そんなに腹が減ってたのか。  
 オサト もう一杯食べてくかい。  
 子供1 なあ、おねえちゃん。  
 オサト なんだ？

子供2 浜中島に近づくと、ほらあれ。

子供3 ほら、おめえ言えよ。

子供4 弁天さまの祟りがあるって本当か？

オサト ああ、本当だよ。夜中にこんなにでっかい顔した「五六郎」が出てくるぞ！

子供たち わあああ、そりやおっかねえ！

それを聞いていた五六郎、リアクション。オセツ、桶の中を見て。

オセツ お梶、もう終わっちまった。

お梶 えっ？あんなに作ったのに。

オセツ あっという間だったな。

お梶 ごめんな、今日は終わりだ。

オセツ 今度は、もっとたくさん作ってやるからな。

村人がお梶、オセツ、オサトを囲んでありがたそうに拝みだす。

お梶 おい、やめるよ。オシたちはそんな犬ヌそれたもんじゃねえよ。

オセツ これはな、諏訪の神さまのご加護だよ。

オサト 「喜びを分かち合えば倍になる、分かち合える人が居ればそれが幸せ」

子供1 これがおねえちゃんたちの幸せなの？

オサト ああ、そうだよ。だからそんなことするな。

子供たち ありがとう。

子供たち、笑顔で去って行く。三人ともその場にへたり込む。

オセツ はあ、もう疲れて立ってられねえ。

オサト この「すいとん」徹夜で作ったからなあ。

オセツ でも、配り出したら、あっという間におわっちまった。

オサト 腹ぺこなんだよ。食うもんなんか何にもねえんだから。

お梶 なあオサト、あれ、もう一度、聞きたいんだけど。

オサト あれって？

オセツ オサトがさっき言ってたやつだな。

お梶 ああ、頼むよ。

オセツ うん。「喜びを分かち合えば倍になる、分かち合う人がいればそれが幸せ」

お梶 ……いい言葉だな。

オサト 死んだおっかあの口癖だったんだ。

オセツ 喜びが倍になるか。

お梶 じゃあ、オシは今幸せなんだな。

オサト お腹は空いてるけどな。

三人 はははは。(ググググウウウ) はあ。(ため息)

そこにその情景を見守っていた五六郎。三人に声をかける。

五六郎 おめえたち、えれえもんだな。

オサト あっ五六郎。

オセツ やばい、逃げようぜ。

鍋を担いで逃げようとする。

五六郎 おい、どうして逃げる。

お梶 オシたちは別に……。

オセツ ちよっと忙しいんで。

オサト じゃ！

五六郎 おい、待て。

三人 ギクツ。

五六郎 弁天さま盗んだのは、おめえたちだな。

三人 やば！

五六郎 おまけに、弁天さまの祟りだなんて噂を流してるのもおめえたちだ

な。

オセツ 全部バシてるぞお梶。

お梶 だからなんだってんだよ。

五六郎 なんでもそんな事するんだ。

お梶 オしたちは、あるお方の命を受けて人助けをしているんだ。

五六郎 人助け？

オセツ そうだ。このままじゃ、みんな飢えて死にしまうからな。

オサト その人、お金たくさんくれるんだよ。

オセツ オサト！

オサト ・・・ごめん。

お梶 この村はオしたちが守ってみせる。

オセツ・オサト ああ。

五六郎 おい。なんだか話がおかしかねえか？

お梶 おっおかしってなんだよ。

オセツ そっそっだよ。別にオしたちはやましいことなんかしてねえぞ。

五六郎 じゃあ、取り合えず、弁天さまを返してもらおうか？

オセツ 逃げるぞ！

五六郎 おい、待て！

オサト オセツ、待ってよ！

オセツ、オサト、行ってしまふ。お梶、五六郎を振り返って。

お梶 五六郎、オしたちだって、いいことと悪い事の区別はつくよ。だけ  
どさ、この世の中、そんなこと言ったら食ってけねえんだよ。金  
をもらったら何でもやるよ。その気になれば、弁天さまだって売っ  
ぱらって金にする。

五六郎 おめえまさか。

お梶 弁天さまは、売ってなんかいいえよ。・・・あの弁天だけは手放せ  
ねえ。何か変なんだ。こう体がこわばっちゃまって、体が動かなくなっ  
ちまうんだ。

五六郎 へえ。そりゃ、不思議だな。だったら、早く返したらどうだ。

お梶 その手には乗らないよ。いざとなったら、この腕を切り落とす

五六郎 て売っぱらってみせらあ。

お梶 バカなことをいうもんじゃねえ。

五六郎 じゃあな。(走り出す)

お梶 おい、待て！

お梶、素早く去ってしまう。五六郎、追うのを諦めて。

五六郎 ・・・くそう。けっきょくバカをみるのは貧乏人か・・・。

五六郎去る。そこに、ぬっと現れる浪人。一部始終を白描が見てい  
た。

白描 ・・・あの女、まさか、生きておったのか。

一幕（六場） 下諏訪宿の旅籠

三味線と人々の笑う声。高島藩の家老、鬼頭村之介と商人の成金屋、為五郎が芸者を上げて大宴会。鬼頭と成金屋、それに合わせて踊っている。鬼頭はドジョウすくいの格好。成金屋はどじょう。

鬼頭  
いいぞいいぞ、もつとやれ。

成金屋  
鬼頭さま、なかなか羽振りがよろしいようで。

鬼頭  
何を言っておる。お主のお陰で儲けさせてもらっておる。

成金屋  
お互いさまですよ。これからもよろしく願いますよ。

成金屋、鬼頭にお酌などしていると、唄と踊りも終わって、芸者衆は部屋から出ていく。

鬼頭  
なかなかの趣向じゃ、他にはおらぬのか？

成金屋  
それが鬼頭さま、ちよっとお話がありまして。

鬼頭  
ほう、また、金もつけの話しか？

成金屋  
はあ、それが・・・。（成金屋、鬼頭に耳打ちする）

鬼頭  
何！あれは諏訪氏が高島城に入城したおりに作られたものだ。なるほど、その弁天が無くなれば騒ぎが広がるな。

成金屋  
もうすでに、村々では、バチあたりなこと、噂が広がっているようです。

鬼頭  
よくやった。しかし、その弁天が諏訪湖の本尊であるとしたら、こちらにバチがあたるなんてことはないだろうな。

成金屋  
鬼頭さま？まさか、本当にバチがあたると？

鬼頭  
いや、はははは。なんてな。そのようなことがあるわけないな。

成金屋  
そうですね。はははは。この世は頭と金です。

鬼頭  
成金屋。お主も悪よのう。

成金屋  
鬼頭さまこそ。

二人  
はははははは。

鬼頭  
それで、その弁天を盗み出した女たちはどうした？

成金屋  
それが、どこかに逃げ去ってしまいました。

鬼頭  
まあよい。そのような者が、弁天をどうしよう問題あるまい。

成金屋  
いえ、それが鬼頭さま。その女たちの中の一人に、ちよっと面倒な者がおりました。

鬼頭  
面倒な者？

白描が姿を見せる。

鬼頭  
何者だ。その女。

白描  
はっ、申し訳ございません。実は（耳打ち）

鬼頭  
何！それはまことか！

白描  
母親は始末しましたが、娘は討ちもらしました。あの激流の中、よもや生きておったとは・・・。

鬼頭  
ばか者！なんという失態。ただちに口を封じろ。

白描  
仰せの通りに。（白描消える）

鬼頭  
して、やつらのねじろは？

成金屋  
浮浪者の集まる山下のくぼったみです。

鬼頭  
ふっ、どうせ死に損ないが住んでいる目障りな村だ。村ごと焼き払っておけ。

成金屋  
鬼頭さま、ご心配には及びません。

鬼頭  
なに？

成金屋  
すでに、此度の工事に反対する者共をたき付け、その村に火を放つ手はすでになつております。

鬼頭  
こちらの手を汚さずに済むということか。

成金屋  
役にもたない食糧もは、いっそ消えてしまった方がいいですな。

鬼頭  
一石二鳥とはこのことだ。

二人  
うははははっ（二人でくしゃみ）うはははははっ！

一幕（七場） 山中の峠

お梶とおサトが剣術の稽古をしている。おサト弁天さまを背負っている。

おサト

えい！

お梶

だめだめ！もっと腰を入れて。

おサト

やあ！

お梶、おサトの木の棒をなんなくかわす。その時、お梶、頭を押さえる。

おサト

お梶、大丈夫か！

お梶

いや、何でもない。

おセツ

どうした、あたま痛てえのか？

お梶

ああ、ちょっと目まいが……。

おサト

ごめんなお梶ちゃん。

お梶

おサトのせいじゃないよ。最近、たまに痛むんだ。

お梶、お守りを見る。

おセツ

それ、いい匂いがするな。

お梶

どうしておしがこれも持っているのかも思い出せないんだ。

おサト

それだけでもね。お梶ちゃんが持っていたのって。

おセツ

そういえば、あんどとき、ねえちゃんって言ってた女の子がいたな。

おサト

ねえちゃんって……。お梶ちゃん、身寄りなんてないって。

お梶

いない……と思うよ。

おサト

一昨年だっけ。お梶ちゃんが、天竜川の川つぶちに流されてたの。

おセツ

そうそう、まるで土左衛門だった。あんどときやビックリしたよ。

おサト

死んでるのかと思って触ってみたら、ピクピクってさあ。

お梶

悪かったな。オレは悪運が強いんだ。

おサト

まあ、あの大水に流されて、生きてるなんて、クマかお梶くらいの

もんだな。

二人

はははは。

お梶

もう言うなって。

二人、お梶を見つめて。

おサト

でも、お梶ちゃんがいて良かった。

おセツ

そうだよ。そうじゃなきゃ、オレたちだって、どうなっていたか。

おサト

あれから、二年も経ったんだな。

お梶、お守りを見つめる。

お梶

自分の名前も思い出せない。たよりになるのは、このお守りだけだ。

おセツ

そのうち本当の名前を思い出さ。

おサト

そうだよ。

おサト、そっとお梶の肩を抱く。

おサト

それまで、あたいたちが守ってやるよ。

おセツ

ああ。

お梶

おサト、おセツ……。

涙するお梶。

おサト

だからさあ。早く剣術教えてくれよ。悪い奴らをぶっ飛ばしてやる

んだ。

おセツ

オレもやろうかな。

お梶

ああ。わかったよ。

お梶を相手に二人は懸命に打ち込む。ぜんぜん相手にならない。お梶は記憶がないのにも関わらず、剣術の心得があるようだ。

オサト なあ、この弁天さまどうする？

オセツ そういやあれ。弁天さまが宿ってるってことだよな。

オサト オしたちがこの弁天さん盗んだ後に精進料理やってたんだもんな。  
昇神儀式！

オサト ……ああそうか。

オセツ オサトは食う事ばかり浮かぶんだな。

オサト へええ。(照れる)

お梶、考え事をしているのか、動きがとまっている。

オセツ ちょっとお梶、何ぼけっとしてんだよ。

お梶 うん。

オサト また、頭が痛いのか？

お梶 いや、なんでもないよ。

オセツ やっぱ、金にかえちまうか。

オサト でも、五六郎、怒ってないかな。

オセツ あいつ怒らせたら、おっかねえぞ。

そこに北齋と為一。北齋は嬉しそうに飛び込んでくる。為一はそれを止めるように追いかけて来た。

北齋 聞いちゃったぞ！

女たち えっ？

為一 先生、やめてくださいよ。わたしたちには関係ないでしょ。

北齋 何を言っておる。関係アリアリじゃ。

為一 なんて？

お梶 何だよ。このじいさん。

北齋 じいさんではない。葛飾北齋じゃ。

為一 いや！（と拍手で盛り上げてみるが）

女たち へえ。

為一 えっ？やっぱり知らない？江戸ではけっこう有名な浮世絵師なんだ

オセツ けど。

女たち 歌川国貞なら知ってるよ。ほら。(団十郎の浮世絵を見せる)

為一 ほら。(全員、団十郎の浮世絵を見せる)

北齋 ええええっ！

オサト この辺の者は、皆それを持ち歩いとるのか？

為一 あたりまえじゃない。

オセツ 世も末だな。

北齋 あ〜っ？(以後、為一とオセツはことある度に喧嘩をしている)

お梶 とここで、おまえたち、今、五六郎がどうか言っていたな。

北齋 あんた、どこから話しを聞いてたんだ？

女たち 最初からだけど。

北齋 くっそう！

お梶 なかなかいい弁天さまだな。もしそれが売りにでるなら。相談に乗っ

北齋 てもよいぞ。

お梶 えっ、あんたこの弁天さま、買ってくれるのか？

北齋 ああ。

オセツ いくら出す。

北齋 これだ。(指を一本立ててみせる)

オサト 何だ。一両か。まあまあだな。

北齋 うっ…いや、十両だ。

女たち 十両！

お梶 売った！

北齋 わしは弁天には金に糸目はつけん！

為一 先生、いつからそんな趣味を？

オセツ 買ってくれよ。それで充分だよ。

北齋 おお、本物ならな。

女たち えっ？

オセツ 本物だよ。今朝、浜中島からいただいて……。  
北斎 譲り受けてきたんだ。  
お梶 ほう。だれに？  
北斎

オサト 五六郎って人。

オセツ (小声で) おい、大丈夫かよ。

北斎 じゃあ、その五六郎に会わせてほしいな。

お梶 (小声で) 大丈夫任せておけ。(北斎たちに) いいよ。じゃあ案内する。

為一 やりましたね先生。これでやっと諏訪湖という所にたどり着くことができそうじゃないですか。

北斎 ああ、かれこれ3日は吞まず食わずで迷っておったからう。

オセツ お梶、いいのかよ。五六郎にぶんなぐられるぞ。

お梶 金だけ貰ったらトン面すんだよ。

オセツ そうか、おめえ、頭いいな。

北斎 なんじゃ？

オセツ さあ、行くよ。十両十両。

オサト おお！

皆走って行く。為一とオセツはドツキあつてる。お梶ひとりそこに残って。

お梶 ねえちゃん……か。

その時、持っていた弁天さまが光り出す。驚くお梶。

お梶 何だこれ。(弁天さまの波動) うっ！

お梶に天から不思議な光が射す。お梶、何かを思い出し顔をこわばらせる。

お梶 ……母上！

一幕(八場) 下浜の飯場

浜中島撤去作業。多くの人足が汗を流している。中には女も子供もいる。

(ステージング③)

Song4

♪砕ける土 明日へと この一振りが 希望

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

♪希望の舟 えいえんの この実りを 里わに

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

五六郎 おい、みんな、作業の手を休めず聞いてくれ。幅三十七間半、横幅、十三間だ。掘り取った土は天竜川に流すな。泥舟に乗せて、後で大船に乗せ替えるんだ。

♪したたる汗に カ・声こだまして なわが手に食い込む

夢追い 立ち上げれ 諏訪人

♪たわわ実る 稲穂見て 村が笑う 息づく

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

♪砕ける土 明日へと この一振りが 希望

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

五六郎 三番区ー作業が遅れているぞ。水中は二尺五寸だ。浅いところは掘り直しだぞ。

舟に土が積まれている。汗まみれの人足たち。みな疲れ切っている。後ろで太鼓に合わせて掛け声。「ドン！よいさ」「ドン！よいさ」が聞えている。

五六郎 よし、こんなもんだ。舟を出せ！  
人足たち おお。

土を積まれた舟を人足たちが力強く押す。

信さん 前から綱で引っ張ろう。さあ、みんなこっちに集まってくれ、一気にひっぱり出すぞ。

人足たち おお。

信さん、人足たちと行ってしまふ。そこに五六郎の妻シズがやってきた。

シズ お前さん。

五六郎 おお、シズ。どうした？

シズ 着替えを持って来たよ。ちっとも家に帰って来ないから。

五六郎 まだ人足が足りねえんだ。これじゃあ、仕事にならねえ。

シズ 大丈夫、その内集まってくれるよ。

五六郎 だけど、中じゃあ、この仕事をよく思っただねえ連中もいてな。

シズ なんてわかってくれないのかね。

五六郎 まあ、人には言い分があるんだろうよ。

シズ そろそろ日が暮れるね。あたしや、飯場に、戻って晩飯の仕度だ。

五六郎 ああ。

そこに信さん帰ってきて。シズ、信さんに頭を下げ、下手にハケる。

五六郎 お前けっこうやるな。おめえがいなけりや、ここまで作業がはかどらなかつたぞ。

信さん そうか？けっこう強引に誘われたんだが……。

五六郎 何？

信さん いや、何でもない。

五六郎 へんなやろうだ。はははは。

信さん、去っていくシズを眺めて。

信さん シズさんは実にいい女房だな。

五六郎 へへへ、そうだろう。なんだ？うらやましいか。

信さん ああ、うらやましい。

五六郎 やい、俺の女房に手なんか出しゃがったら、承知しねえからな。

信さん わかっているよ。怖い顔するな。

五六郎 それならいいけどよ。なんだよおめえは身固めてないのか。

信さん ああ、なかなかいい人に巡りあえなくてな。

五六郎 ドンくせえやろうだ。

信さん 実は、若い頃、周りに隠して女と暮らしたことがある。

五六郎 ほう、やるねえ。

信さん 子供も二人できてな。あの頃は幸せだった。

五六郎 どうしたんだい。その女と2人の子どもは。

信さん 強引に引き離された。

五六郎 トロいんだよ。ちゃんと探したのか？

信さん ああ、まったく足取りがつかめない。この諏訪にはいるハズなんだが。

五六郎 しょうがねえ。俺も人肌ぬぐよ。おめえ、なんだか気に入ったからよ。

信さん そつか。よろしく頼む。

五六郎 (人足たちに) よし。準備はいいか！

信さん おお！

人足たち おお！

信さん 舟を出せ！

五六郎

信さん

よいさ、よいさの掛け声。太鼓の音も聞える「ドン」「ドン」船はゆっくり沖にでる。

無邪気な子供たちが騒いでいる。

子供1 ホラ見ろ。バカどもが土を舟にのせて運んでるわ。

子供2 ありや阿呆のやることだ。はははは。

子供3 ああ、あの舟は「阿呆丸」だ。

子供4 そりゃいい。あほうが阿呆丸に乗って行くわ。

全員 やあい、やあい、あほう！あほう！阿呆丸よおー！はははは。

五六郎 このやろう！

子供たち わああああい

と逃げて行く。そこに、漁師の染吉と作造。二人は、五六郎のやつてることが気に入らない。

子供は素直だなあ。

作造 そうだ。

そこにシズ。騒ぎを聞きつけてやってくる。

シズ あんた。どうしたんだい。

五六郎 いつもの嫌がらせだ。気にするな。

染吉 やい、五六郎。この工事を今すぐやめろ！

作造 そうだ。(五六郎の工事を良く思っていない村人も集まって) そうだ。そうだ。

シズ 何だい何だい、嫌がらせなんて唐変木（かまき）がやることだよ！

五六郎 おい、相手にすんじゃねえ。

作造 こんなことすりゃ、魚が捕れなくなっちまうじゃねえか。

染吉 そうだ。(村人たちも) そうだ。

シズ そりゃ、あんたたちの腕が悪いんだよ。

作造 なんだと！弁天さまを返せ！この罰当たりが。

染吉 そうだ。(村人たちも) そうだ。

五六郎 そんなもん、俺たちのせいじゃねえだろう。

作造 弁天さまが恋しいなら、少しはあんたたちも探したらどうだい。

染吉 バカいうな。ああいやあ、こう言う。

作造 そうだ。(村人たち) そうだ。

染吉 おめえも、そうだそうだ、言ってねえで何か言え。「バシッ！」

痛てえ！・・・このおおお、おたんこなす！

以下、子供たちが一言づつ「たわいもない悪口を言う」

五六郎 おめえら子供に何言わせてんだ！

作造 へっ。口で言っただけからねえなら。しょうがねえな。

シズ やるか？下諏訪宿のおシズさんをなめんじゃないよ。

五六郎 そうだ、シズをなめるのはオレ一人で充分だ！

客席 ……

いたたまれない染吉と作造、村人たち。そして何より、客席の引き潮のような静けさ。

作造 ……今のはちょっと残念な感じだね。

染吉 ああ、まったくのドン引き野郎だ。

作造 こんな破廉恥な野郎はやってしまおうか。

染吉 ああ、ぼこぼこにやってしまおう。みんな、サクッとやっちまえ！

村人たち おお！

五六郎とシズを囲んで、じりじりと詰め寄っていく。そこにあの女たち。

オセツ ねえ。あれ五六郎じゃないの？

お梶 そうだよ。五六郎だよ。

オサト  
オセツ  
まずいよ。あいつらにやられちゃうよ。  
あたいらの十両が！

女たち五六郎を助けに入る。

作造  
なっなんだおめえら。

お梶  
おめえらこそなんだよ！

染吉  
ああ。山下の浮浪者か。

五六郎  
やめる。喧嘩はいけねえ。

お梶  
へっ、わからずやのへっほこ漁師が。

作造  
なんだと！

染吉  
乞食のくせに生意気な口まきやがって！

五六郎  
おい！やめる！喧嘩してもしょうがねえだろつ。

作造  
もう、許さねえ。女だつて手加減しねえぞ。

オサト  
それはこっちの台詞だ。この馬の糞。

作造  
何だと、この豚のケツ！

シズ  
豚？・・・殺す！

オセツ  
やっちなまえ！

全員  
おお！

もう手がつけられない取っ組み合い。五六郎も巻き込まれ、大騒ぎ。そこにやってきた北齋と為一。北齋は為一が引つ張る荷車で運ばれて来る。

村人もいつの間にか増えて人でいっぱいになっている。

為一  
あれ、どうしたんでしょ？

北齋  
うむ、喧嘩だな。

為一  
北齋先生！見てください。諏訪湖です。やっと着きましたねえ。

北齋  
うむ、ワシの言った通りじゃ。

五六郎  
やめるやめる！

為一  
先生！この人が五六郎でしょうか。

北齋  
うむ。

五六郎、為一をぶんなくって北齋が乗っている荷車を奪つ。

為一  
うが！

北齋  
なに？

そこにオセツもやってきて為一を殴る。

為一  
うが！・・・なんでよ。

オセツ  
何やってんだよ。おせえじゃねえか。

為一  
しょうがねえだろうが。先生が走れないっていうから。

オセツ  
トロいんだよ。

物すごい勢いで、取っ組み合いの中に突っ込む五六郎。

五六郎  
やめろつて言ってるだろうが！

「ドカン！」「ひえええ！」と、飛ばされる女たちと村人たち。

(諏訪湖に落とされてもいい)

痛てててて！

皆  
おまえ、ワシを殺す気か！

北齋  
知るか！

作造  
いててて、何だ！このじじいは。

北齋  
ワシはじじいではない。葛飾北齋じゃ！

皆  
？

為一  
えっ？やっぱりぜんぜん知らない？いてて。

北齋  
江戸ではけっこう有名な浮世絵師なんだけど・・・。

染吉  
歌川国貞なら知ってるぞ。ほら。いてて。(団十郎の浮世絵を見せる)

皆 ほう。いてて。(全員、団十郎の浮世絵を見せる)  
 為一 くそおおお！諏訪の連中は全員それを持っているのか！

皆、体中痛いののに、懐から「市川団十郎」団十郎に囲まれる北斎と  
 為一。

北斎 くそおお、こうなったら諏訪湖の浮世絵を意地でも描いてやる。

為一 先生、やっとやる気になってくれましたね。

お梶 おい、十両。(弁天さまを突きつけて)

北斎 そんな浮世絵を持つてるやつは嫌いじゃ。

お梶 なんだとじじい！

オセツ 詐欺師か、お前ら。

為一 おめえこそ、泥棒だろ。

オセツ なんだと！

シズ おまえさん、浜中島の弁天さまだよ。(シズ、弁天さまを静かに受け取る)

お梶 あっこれは……。

五六郎 おめえたちも悪かったと気づいて、返しに来てくれたのか。

シズ ありがとうよ。

オサト ……いえ。

シズ、お梶の顔をのぞき込んで。

シズ あれ？あんだどっかで見かけた顔だね。

お梶 あんたなんか知らないよ。

シズ (気がついて) 佳代さんの娘じゃないか！

お梶 えっ？

シズ 今までどこにいたんだよ。みんな心配していたんだよ。

お梶 ……。

シズ ねえ、お美緒ちゃんだろ？

お梶 お美緒……それ……オしの名前か？

舟が諏訪湖を渡って向こう岸に向う。為一それに気がついて。

為一 先生、あれ！

北斎 おお、なんと勇壮な景色じゃ。

シズ あの舟があれば大丈夫。あたしや、あんな男前な舟、生まれて初めて見たよ。

五六郎 この辺の連中はあの舟を「阿呆丸アバマ」だとぬかしやがる。

シズ 「阿呆丸」？

五六郎 ああ。まったく、人をバカにしやがって。

シズ いいじゃないか。

五六郎 えっ？

シズ だって、こんな仕事。阿呆アバマじゃなきゃ出来ないよ。

五六郎 はははははは、まったくだ。阿呆アバマな仕事だ。

シズ ああ。

五六郎、そこにいる連中に向って。

五六郎、そこにいる連中に向って。

五六郎 おお。おめえたちもやってくれるな。

染吉・作造 えっ？

堂々と浮かぶ、「阿呆丸」を見ながら。

五六郎 あの一槽の舟の土から、どの位の田んぼが生まれると思う。よおし！

五六郎、浜中島の掛け橋を走って行くと、島の頂上まで駆け上がり、鎌を手にする。それを高く振り上げ、土に刺す。

五六郎 見る。こうして鎌をたてた分だけ土は舟に積まれていく。この一塊

の土で、どの位の米が採れると思う。俺はなあ、諏訪湖の湖畔が収穫の秋に黄金色に染まるのを考えると、いても立ってもいられなくなるんだ。

あっけにとられる村人たち。

染吉  
……あいつはすごいわ。

作造  
……ああ。

五六郎  
スキのひと刺しは、腹いっばいのおまんまだ。ほら、おめえたちもやってみろ！

皆、五六郎の熱意に圧倒されて。

染吉  
……やってみるか。

作造  
……俺たちもやってみるか。なあ、みんな！

皆  
おお。

染吉、作造、そして、オサト、オセツ。さっきの子供たちまでもが、「やってみるか」と浜中島にかけあがり、作業を始める。村人は沢山いるといい。

面白い男じやのう。

先生。

北齋  
為一、紙と筆を出せ。  
為一  
はい。

為一が、それを北齋に渡すと、北齋、何かに取り憑かれたように、下書きを描き出す。それを、サポートする為一。もくもくと作業を続ける人々。夕日に照らされ、美しく光輝く。

――幕―― (休憩)

二幕（一場） 諏訪湖の見える丘

幕が開くと、北齋が絵をもくもくと描いている。表情も穏やかで知的である。

そこに、三人娘のオサトがやってくる。そっと近づき絵を覗き込む。

オサト おじいちゃん。絵、うまいなあ。

北齋 おお、オサトちゃんか。

オサト 諏訪湖の絵を描いているんだね。

北齋 ああ、ここから見える高島城や舟を書き写してるんじゃないよ。

オサト 浜中島と弁天島だ。

北齋 …… 浜中島はもう随分、切り崩されてしまったな。

オサト あっ、それ、富士山か？

北齋 そうだよ。ここから見る富士は、諏訪湖の湖面によく映えて実に美しい。

オサト ……

北齋 ン？オサトちゃん、どうかしたのかい？

オサト …… あたいは、こんな湖、嫌いだ。

北齋 えっ、どうして？

オサト 今は穏やかだけど、長雨が降ると、水が村や畑を飲み込むんだ。

北齋 うむ、この大水は荒れ狂った龍だと聞く。

オサト 一昨年の大水で、あたいの家は流されちゃった。

北齋 家の者はどうした？

オサト …… みんな死んじゃった。

北齋 そうか、それは辛かったなあ。

オサト でも、今は平気だ。お梶もオセツもいる。

北齋 そうだな。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

北齋 ほう、剣術の。また、どうして？  
オサト お梶とオセツをこれで守るんだ。えい！やあ！

北齋 今、描いていた絵を差し出して。

北齋 ほう、これをやろう。

オサト えっ？いいの？

北齋 ああ、いいとも。これはまだ下書きだ。

オサト ありがとう！おじいちゃん。大切にするよ。

北齋 （笑顔でうなづく）

嬉しそうに絵を見ているオサト。オサト去りぎわに。

あっ、いけない。ありがとう。北齋先生。

オサト

北齋 ああ。

オサト去る。その様子を見ていたのか、信さん入れ違いにやってくる。

信さん 諏訪湖は豊かな恵みも運ぶし、全てを破壊して持ち去ってしまう。

昔も今も変わらない。それを神として崇めてきた。

神仏とはそういうものです。

あの子たちをどう救えばいいのか。

もうすでに救っているではないですか。

それが吉とでるか凶か。やってみなければわからないよ。

人事を尽くして天命を待つ。問題は結果ではありません。大切な

はそれを勇気を持って行えるかどうかです。

天命を待つ…か。

そのために五六郎にすべてを託したのでしょうか？忠誠さま。

なんだ。知っておったのか。

お父上の忠誠さまにはご懇意にしております。

信さん  
そうであつたか。

北齋  
今、高島藩の財政は悪化していると聞いていますが。

信さん  
ああ、藩再建を目指して検地なども行っているが、このありさまだ。

北齋  
江戸も商人の力が増して、以前の武士の姿はありません。どこも財政は火の車。

信さん  
「役人の子は、にぎにぎをよく覚え」……か。

北齋  
さよう。袖の下がモノをいう世の中です。そんな世相を皮肉った川柳が流行るのもうなずけます。

信さん  
実は高島城でも不穏な動きがあつてな。

北齋  
いずれの藩も同じこと。で、此度はどのような。

信さん  
六年まえ、この地で百姓一揆があつた。これは、本丸の不祥事と、二の丸の鬼頭家も、三の丸の千野家も藩主の地位を狙っている。

北齋  
それは藩の一大事ですな。

信さん  
父上も、頼みのオレがこんな成りだ。さぞかし心配であつたな。

北齋  
私にはそうは思えません。

そのとき、遠くの方から半鐘の鳴る音。

信さん  
ん？何事だ。

北齋  
有賀の方ですな。

信さん、あわてて走りさる。北齋それを見送つて。

北齋  
あなたさまは、この諏訪を変えるお人です。

北齋、遠くの空を見つめ嫌な風を感じる。

二幕（二場）山下のくぼったみ村

貧民区が焼き払われている。激しく鳴り響く半鐘の音。すでに村は火の海。もう手がつけられない。

影の声  
火事だ！にげるー！

影の声  
誰か！助けてくれえ！

五六郎  
おい、大丈夫か。

お梶  
だめだ。村ぜんぶに火がまわつてる。

五六郎  
逃げ遅れた者はいないか。

お梶  
わからないよ。気がついたらもう火に巻かれていたんだ。

五六郎  
くそう。

熊  
おおい。五六郎。

熊  
怪我人は。

五六郎  
まだいっぱいいるよ。手が足りねえ。

平汰  
早くしろ。こつちだ。

熊  
大丈夫、必ず助かる。

文治  
みんな、諏訪湖にでるんだ。あわてるな。

五六郎  
「火消し」はどうした？まだ来ないのか。

オセツ  
ここに住んでるもんはみんな邪魔者にされてるんだ。

オサト  
火消しなんて来てくれないよ。

五六郎  
そんなバカな。

その時、柱の倒れるような大きな音。平汰が飛び出して来て。

平汰  
五六郎！手を貸してくれ。熊が倒れた柱に挟まれた。

五六郎  
なに？熊が。

五六郎上手へ。

お梶  
ちくしょう。

オサト  
あいつらだ。五六郎をよく思っていない連中が火をつけたんだ。

オセツ  
この村に水田が出来る事を嫉んでるんだ。

お梶  
だからって、こんなひどいこと。

白猫  
なんだおまえたち。まだ生きておったのか。

お梶  
おめえだな。どうしてこんなひどいことした。

白猫  
まさか、このような村に用はない。

オセツ  
このやろう！

お梶  
もう許さねえ！

白猫  
おまえ。

お梶  
えっ？

白猫  
オシはお前に用がある。

白猫は言うが早いかお梶に切りかかると、お梶はするりと逃げて、落ちていた木の枝を拾う。とっさに構えるお梶。

白猫  
ほほう、何の真似かな？

お梶、木の枝を振り払うと、眠っていた剣士の記憶が体に蘇る。目つきも変り、まるで風のように白猫に切りかかる。

白猫  
なかなかやるようだな。

白猫とお梶の激しい死闘。しかし押されきみのお梶。それを助けようとオサトが白猫に抱きつく。

オサト  
お梶ちゃん、にげる！

お梶  
やめろ！オサト！

震えながら木の枝を構えるオサト。あえなく切られる。

お梶・オセツ  
オサト！

白猫、なおもオセツを切るうとして。

為一  
オセツ！

お梶  
・・・

白猫、為一の利き腕を切る。

為一  
うつつつ。

オセツ  
あっ！

(取り乱しながらも白猫に挑む) ああああっ！

殺陣 お梶と白猫、戦つ。とうとうお梶、白猫に追いつめられて。

白猫  
殺すには惜しい腕前だ。

殺陣 白猫、お梶に刀を振りかざす。お梶も覚悟を決める。そこに着流しの侍。信さんだ。すんでのところで白猫に小刀を投げるが、なんなくかわされる。

白猫  
何者だ。

信さん  
名乗る名がねえわけじゃねえが、聞かねえほうが身のためだ。

白猫  
なんだと。

殺陣 燃え盛る炎の中続く。しかし、圧倒的に強い信さん。とうとう白猫を追いつめて。

白猫 なかなかやるな。今日のところはお預けとしよう。  
信さん 待て、逃げるとは卑怯。

白猫、火の中に逃げてしまった。

信さん くそお。

信さん (信さん、切られたオサトの様子をうかがうが、すでに息をしない)・・・ひでえことしやがって。

お梶 オサト・・・。

お梶、オサトに駆け寄り、抱き起こそうとする。が、ぐったりと倒れてしまうオサト。

オセツ オサト！

お梶 ・・・・なんだよオサト。おまえ、オしを守ってくれて言ったじゃねえか。

しかし、オサトは答ええない。

お梶 ・・・・なあ、ずっと守ってくれていったらどう。なあ、オサト。・  
・・・・オサト！

そこに五六郎。オサトの手を取り無言で涙を流す。五六郎、イカリをこらえ切れず。地面をたたきつけ嗚咽する。

五六郎 ううううおおおおおっ！

しかし、お梶の叫びも、五六郎の嗚咽も、燃え盛る炎にかき消された。

## 二幕(三場)釜口の現場

作業はつづく。舟を押す者。モッコを担ぐ者。  
そこに北齋の姿。為一とフラフラになって、皆の後をついていく。  
五六郎それを見付けて。

五六郎

じいさんは力仕事はしなくていいよ。作業が計画通りいってるか、掘った深さを計ってくれりゃいい。

北齋

人を年寄り扱いするな。まだまだ若いもんには負けん！

為一

ずいぶん人足が減ってしまいましたね。

五六郎

ああ、弁天さまと祟りだとか言い出すヤツが増えてな。中にはこの

為一

仕事に関わると命を落とすなんて言い出すヤツも出てきた。  
五六郎さん。

五六郎

諦めやしねえ、諦めはしねえけどよ・・・。それよりおメエたち、

為一

こんな田舎に何しに来たんだ。

五六郎

・・・私たちは、浜中島の絵を書きに。

為一

浜中島の・・・。そりゃあ悪いことしたな。

五六郎

いえ、気にしないでください。先生は他に書きたいものを、この諏訪湖で見つけたようですから。

五六郎

へえ。

北齋、フラフラになりながらも、作業を続ける。

五六郎

気だけは強えようだな。

為一

負けず嫌いなんですよ。そうじゃなきゃあの歳で旅なんかできませ

五六郎

んよ。  
あちこち旅してんのか？

為一

まあ。

五六郎

たいしたもんだ。もう七十近けえだろ。

為一

七十二ですよ。もやは化け物です。

為一 先生、辛いと思います。オサトちゃん、先生にすっかりなついてま  
したからね。  
五六郎 ……まっただ。だ。

北齋がもくもくと作業をしている。時折目に手ぬぐいを当てている。  
(泣いている)

為一 風景だけを描いても意味がない。そこに住む人の生き様を盛り込む  
ことができればって。

五六郎 生き様を盛り込む？浮世絵にか？  
天才です。とても私が得られる世界じゃない。  
へえ。

為一 見ててごらんさい。後の世に残る名作が生まれますよ。  
五六郎 この諏訪湖でか。  
為一 そうです。  
五六郎 ……。

為一 だから五六郎さん。負けちゃいけませんよ。ここに集まってる村人  
は、あなたを信じているんですからね。  
五六郎 ああ、わかってるよ。

オセツが遠くでこちらを見ている。為一それに気がつきオセツに近  
づく。

オセツの気持ちを察する為一。

シズが五六郎に寄り添う。そこに信さんやって来て。

信さん 火事の犠牲者は裏山の寺に葬った。

シズ あの子たちは？

信さん ……もう少しオサトちゃんと、一緒にいたいそうだ。

お梶、白い風呂敷を二つかかえてやってくる。信さんは部屋の中へ。  
お梶は庭に佇んでいる。後ろからオセツと為一も見守っている。

シズ お美緒ちゃん。

お梶 ……おシズさん、こいつらといる間は、お梶でいいよ。

シズ ……ああ、わかったよ。

信さん 家や田畑を失った者たちが、何百人と暮らしておった。女子供もおっ  
てな。ひどい暮らしぶりだ。

シズ お茶でも入れましょう。

信さん すまんな。

お梶、オサトのお骨を抱きしめて。

お梶 諏訪の殿様はバカだ。

信さん えっ？

お梶 貧乏人のことなんか、何もわかってない。大きなお城でふんぞり返っ  
てるんだ。

信さん ……まっただな。

お梶 あたいらのことなんて…。(涙) 目にもとまらないんだ。

涙を必死にこらえるお梶。信さん、庭に降りて、お梶の肩をそっと  
抱く。

信さん ……すまん、すまんな。

信さん、自分の不甲斐なさに心を傷める。そんな信さんを見て。

お梶 へんな信さん。べつに信さんのせいじゃないよ。

信さん ……。

そこに五六郎がやってくる。

五六郎 信さん。火事で焼け出されたもんが裏山の寺に移動するんだ。手伝わてくれねえか。

信さん ああ、承知した。

お梶が気になる信さん。そこに一人の侍がやって来て控えている。信さんそれについて近寄る。

侍 若殿。

信さん 食料の手はずはついたか。

侍 はっ。米十俵と塩を運ばせました。

信さん ご苦労。

侍 それから若殿。此度の一件、影で家老の鬼頭どのが関わっております。

信さん 良からぬ噂をたて、諏訪家を追いつめるつもりか。

侍 すでに本丸の不祥事と城内が騒がしくなっております。

信さん そのまま監視を続けよ。そのうち尻尾を出すだろう。

侍 はっ。(去る)

信さん 鬼頭め、とうとう動き出したか。

信さん、厳しい表情で去る。

お美緒 ……五六郎。

五六郎 オサトちゃん。丁重に葬ってやろうな。

お梶 ……ありがとう。

五六郎、目の前にひろがる諏訪湖を見て。

五六郎 浜中島撤去のもう一つの目的は、無宿人や浮浪者を助けることだった。一日、二升五合。これだけあれば、飢えた村人がなんとか生き

て行ける。

お梶 ああ。みんな喜んでいたよ。五六郎は生き神さまだって。

五六郎 何が生き神さまだ…オレはその連中を守ってもやれなかった。

お梶 ……いや、オレのせいだ。オレが変な噂を立てたばかりに…恨みを買っちゃったんだ。

五六郎 そんなことあ些細なことだ。このボンクラ頭のせいなんだよ。

お梶 五六郎。

五六郎

良い事だと押し進めて来たことも、中にはそれが迷惑だと感じる者もいるってことだ。オレはそれをないがしろにしてきた。その結末がタベの火事だ。オレは沢山の人を犠牲にしちまった。

そこにシズお茶を持って現れる。

お梶

なに言ってるんだよ五六郎。確かに始めのうちは、こんな途方もないこと出来るわけがないと思っただよ。迷惑だとも思った。だって、どんなに偉い人だって、金持ちだって、諏訪湖の大水をとめることはできなかったんだから。でもさ、あの舟に沢山の土を積んでる姿を見て、みんな希望を持ち始めたんだよ。もしかしたらうまく行くんじゃないかって。だから、いつかきくと、みんなもわかってくれる。誤解をした連中も考えを変えてくれるよ。少しづつかも知れねえけど。そうじゃなきゃ、死んでいった奴らが浮かばれないよ。

シズ

そうだよあんた。この子のいう通りだ。島を削り取るなんて芸当を、世の中の誰ができるっていうんだい。あんたがビシツとしなきゃ、ついてくヤツも、ついて来ないよ！

お梶、白木の箱を抱きしめながら。

お梶

「喜びを分かち合えば倍になる 分かち合う人がいればそれが幸せ」  
そくだよな、オサト。  
「喜びを分かち合えば倍になる」か。へっ、子供に教えられちまっ

五六郎

シズ たなあ。  
 身にしみただろ。ほら！お茶でも飲んで目を覚ましな！  
 五六郎 ああ。(お茶を飲む) ああああつ、うめえ！このお茶はまた格別うめえな。(涙)

シズ あんた、この荒れ果てた沼地が田んぼになるんだろ。  
 五六郎 ああ、だっ広い田んぼに生まれ変わる。秋には一面、黄金色の稲穂が風にザワザワと揺られるだろうよ。  
 シズ 目の覚めるような景色になるだろうね。死んだ人たちも、さぞかし喜ぶよ。  
 五六郎 ああ。墓前に積み切れねえほどの握り飯、供えてやらあ。  
 そこに平汰、文治、熊、オヨネ、オキヨがやって来る。  
 皆 五六郎！  
 ぞくぞくと村人が集まってくる。闘志みなぎるその姿に答えて。  
 五六郎 平汰、舟が通る水路を開けたか。  
 平汰 ああ、有賀村まで深く掘り下げたぜ。  
 文治 後は堰を切って諏訪湖の水を流し込めば水路の出来上がりだ。  
 五六郎 よし、堰を切れ。舟を通すぞ。  
 皆 おお！  
 文治と平汰。鋤をたてて堰を壊す。けたたましい音を立てて水が流れ出す。  
 五六郎！  
 舟を通せ。有賀村の奥から埋め立てるんだ。  
 皆 おお！

為一 その場に為一とオセツ。その情景を見て感動する。  
 見ろオセツ。舟が陸を登って行くぞ。  
 オセツ オし、こんなの初めて見た。すげえ、すげえよ。  
 為一 オセツ、俺たちにも何かできないかな。  
 オセツ えっ、俺たちって……。  
 賭けてみてえんだ、あの途方もないアホウに。  
 為一 ああ、一緒にやろう。  
 オセツ お触れを書いたらどうだろう。諏訪中に貼りまくるんだ。  
 為一 いいね。きつと村人が集まってくれるよ。  
 オセツ よし。

為一、背負ったいた箱を降ろすと筆と紙を出す。字を書こうとして。  
 くそおお、思うように動かねえ。  
 為一 ごめんよ。あたしのために利き腕を……。  
 為一 気にするな。こんなもん……(痛む) うっ。  
 そこに北斎やってきて。  
 北斎 どれ、ワシが書こう。  
 為一 先生！  
 北斎 「浜中島掘削に参加されたし 一日二升五合の米を与える」  
 オセツ じいさんは字もうめえな。  
 北斎 だからワシは……。  
 為一 先生、ありがとございます。  
 北斎 うむ。これを摺り師のところを持って行きなさい。半日もあれば千枚は刷れるだろう。  
 為一 はい。  
 北斎 それから、せりせりせりせり、尊師北斎へ。これを高懸、前、守屋宗則どのに届けて来なさい。

為一 守屋さまとは？

北斎 諏訪大社、御柱の総代じや。このような老いぼれの文でも、何かの

役に立つやも知れん。

為一 北斎先生。

北斎 為一、よく見ておきなさい。彼の地に暮らす、人々の生き様を  
為一 はい。

為一、オセツとともに走りさる。北斎空を見上げて。

北斎 ……諏訪の民が一つになれば、この工事は必ずうまく行く。諏訪  
の明日は諏訪人の手で築くのじや。

暗転

二幕（四場）高島城

家老の鬼頭村之介と成金屋為五郎が話しをしている。白描が傍に控  
えている。

鬼頭 何！工事が進んでおると。

成金屋 はい。先日の火事もかえって村人のやる気をおおってしまったよう  
です。

鬼頭 くそおお。なぜ怯えん。奴らは皆死にたいのか？

成金屋 人足も五千人ほど集まってしまいました。もっとも見積もりは一万  
五千のハズ。とても期限内に終わりはしないでしょう。

鬼頭 忠誠め、裏で五六郎を支援しているようだが、目にモノをみせてや  
る。村人に金をつかませて工事の邪魔をさせる。この工事、何とし  
ても失敗に終わらせるのじや。

白描 はっ。

鬼頭 白描、今度こそしくじるなよ。

白描、無言で頭を下げると去る。

成金屋 鬼頭さま、実はわたくしめにもう一つ良い考えが。

鬼頭 ほほう、聞かせてみる。

成金屋、鬼頭に耳打ち。

鬼頭 なるほど、それは面白いな。

成金屋 五六郎さえいなくなれば、工事は頓挫しましょう。

鬼頭 成金屋、お主はまっこと悪よのう。

成金屋 ご家老さまこそ。

二人 わはははははは。

暗転

二幕（五場）釜口の排水口付近

激しい雨。それでも工事を進める五六郎。夕暮れ。

五六郎 いいか。舟の流れに取られるな、杭でしっかりと固定するんだ。

そこに平汰と文治。

平汰 五六郎、戻ったぞ。

五六郎 ご苦労だった。有賀村の方はどうだ？

文治 順調に行ってるよ。三町歩ほど埋め立てが終わった。ただ、人足たちが大分疲れて来てるようだ。

五六郎 そりやそうだろう。毎日、この重労働だ。それにこの雨じゃ体もたねえ。今日の仕事は終いにしよう。

平汰 わかった。皆に伝えて来る。

平汰 去る。雨が小降りになる。

文治 五六郎。まだまだ、人足が足りねえ。どうにかならねえのかな。

五六郎 ああ、今、村の名主たちに声をかけてるところだ。期限までに工事を仕上げるには、あと七千人は必要だ。

文治 このままじゃ人足がへたばっちゃう、宜しく頼んだぞ。

五六郎 ああ、わかった。

信さん そこに、太い縄を引っ張って信さんとお梶がやって来た。

お梶 五六郎！水の流れが早くなった。このままじゃ舟が流されちゃう。どこかにこの縄を縛って、舟を固定したいんだが。

五六郎 足元がぬかるんで舟を繋いでおけないんだ。ああ、わかった。その杭はどうだ。よし貸してみる。

五六郎、信さんとお梶から縄を受け取ると、太い杭に縄を縛りつける。

お梶 五六郎、さっき高島の侍が来て、米を百俵、荷車で積んで来たぞ。

五六郎 ありがてえ。高島の若殿さんはやっぱり話しのわかる人だ。

お梶 ああ、オレも少し見直したよ。

信さん はははは。そうか。見直してくれたか。

五六郎 まるで信さんが、諏訪の若殿さんみてえな言い方だな。

お梶 えっ？ああ、そうか。すまんすまん。

五六郎 皆で笑う。

お梶 そういうなお梶。信さんがいなきゃ、ここまで来られなかった。感謝してるんだ。

信さん そうだな。信さん、ありがとう。

五六郎 よせよお梶。背中がムズムズするだろう。

信さん 皆笑う。

お梶 あの、弁天さんのご加護じゃねえのか？

五六郎 飯場のすみに置かれている弁天さま。

信さん そうだな。

お梶 あの弁天さんに出会ってから、不思議なことばかり起るんだ。あれは高島城築城の折りに祀られた由緒あるものだ。オレとあの女を引き合わせてくれたのも弁天さんだ。

五六郎 ああ、前に聞いた、引き離されたって女の話しか。引き離された？

お梶 そこにシズ、オヨネ、オキヨ。荷車に鍋を積んでやってきた。

シズ あんた。あつたかい「すいとん」を作ったよ。  
 オキヨ みんな腹を空かせてるだろ。  
 オヨネ これで精がつくよ。  
 五六郎 ありがてえ。こりやうまそうだ。今日の作業は終いだ。  
 信さん よし、人足を集めよう。オヨネ、オキヨ。こっちへ頼む。  
 オヨネ・オキヨ あいよ。

オヨネ、オキヨは荷車を引いて去る。

シズ お美緒ちゃん。  
 お梶 えっ？

シズ、後ろからついてきた女の子を連れて来て。それを見ている信さん。

シズ もうそろそろ、お美緒ちゃんでもいいだろう？ほら、この子がお前に会いたいって。  
 お梶 ……えっ。

その女の子はお悠。お悠がお美緒の前にかけ寄って。

お悠 ……ねえちゃん。  
 お梶 おまえは…。

シズ二人にはほほ笑みかける。神妙に五六郎の元に近づく。辺りはすっかり暗くなって、空には月が雲間から現れた。遠くで聞える賑やかな声。ほんのりと明りも見える。オキヨたちが人足に「すいとん」を振る舞っているらしい。それを、笑顔で見ている五六郎。

シズ おまえさん、やだねえ、びしょぬれじゃなか。

五六郎 何を言ってる。お前だって。

五六郎、シズの髪を手ぬぐいで拭いてやる。信さんその姿を見て行くとするが。

五六郎 ……シズ、ちよっと話したいことがあるんだ。  
 シズ お金のことかい？

信さん、シズの言葉に身を隠し話しを聞く。

シズ もう売る田畑なんかありゃしないよ。  
 五六郎 ……そうか。

シズ こうなったら、家を処分して…。  
 五六郎 それじゃあ、おめえに迷惑がかかる。  
 シズ 今さら何言ってんだい。

五六郎 ……すまねえな。俺が甲斐性がねえばかりに。  
 シズ また、稼げばいいじゃないか。  
 五六郎 すまねえ。  
 シズ おまえさん、あたしや、あなたと一緒にだよ。

信さん。二人の会話に心を傷める。月を見上げて。

信さん 「こぐ舟の 行衛もそれと みつうみの 波に照りそう 秋の夜の月」…か。  
 五六郎、心配するな。おめえを見捨てるようなことはしねえよ。

お梶とお悠が何かを話している。五六郎とシズ、二人を見て。

シズ でも、佳代さんも可哀相なことしたね。あの子たちを残して死んじまうなんてさ。

五六郎 ……ああ。

シズ 佳代さんには、あたしが昔者になりたてのころ、ずいぶん世話になっ

たんだよ。

ちよつど、あたしがお座敷に上がれるようになったところかね。佳代さんに男ができたんだ。お似合いだったね。まるで、お雛さまのようだった。

五六郎 それがあの子の父親か。

シズ ああ、一緒に暮らすようになって5年くらいたったかね。その男が、高島藩のえらい侍だってわかってね。身分違いつてことで、泣く泣く引き裂かれたんだよ。

五六郎 いったい誰なんだ、そのえらい侍ってのは。

信さん、その話を聞いて表情を変える。

信さん ……その話しは本当か！

シズ 信さん。…ああ、こんなところでウソ言たつてしょうがないだろ。

五六郎 なんだよ信さん。神妙な顔しちやつてさ。どうかしたのかい？

信さん ……佳代。

五六郎 えっ？…おい、若けえ侍って…。

シズ、信さんの顔を良く見て。

シズ えっ？そつういえば信さん、あんた…。

その時、飯場に置いてあった弁天さまがグワンと光出す。お梶のフラッシュバック。

「怪しい影が二人の女を川淵まで追いつめる。一人の女を切る」

お梶 母上。

「もう一人の女。切られた女を抱いて川へ飛び込む」

お梶 母上！母上！

フラッシュバック終了。お梶。その場に倒れる。

五六郎 おい！大丈夫か！

お悠 ねえちゃん！

信さん おい、しっかりしろ！

ほどなく目覚めるお梶。記憶がもどっている。(お梶↓お美緒)

お美緒 ……。

お悠 ねえちゃん。

お美緒 ……お悠。

お悠。お悠。思い出してくれたんだね。あたいのことわかるんだね。

お美緒 (お悠に抱きつく)

五六郎 正気をとりもどしたのか？

シズ ……よかったねえ、おまえさん。

信さん、震える手で、二人の肩を抱く。

信さん ……お美緒、お悠。

その時、大きな爆発音と土砂の崩れる音。

五六郎 何だあの音は！

信さん 釜口の方からだな。

その時、舟を繋ぎとめていた縄がぐいぐいと引かれる。

五六郎 舟が流されてる。  
信さん しまった。杭がもたねえぞ。

キリキリと音を立てて、縄が引かれる。

五六郎 くっそお！

五六郎、縄を握り、自らも引つ張る。

村人たちのざわめき、悲鳴。けが人をして運ばれる者。顔を血で染める者。

足を引きずりながら助けを叫ぶ者が次々とやって来る。

平汰 五六郎！

五六郎 どうした。

平汰 大変だ。浜中島の土砂が崩れて、天竜川に流れ込んでる。このままじゃ、舟が天竜川に押し流されるぞ。いったいどうすりゃいいんだ。

信さん おい、文治。五六郎を手伝ってやれ。平汰と後の者はオレについて

来い。川下の村にこの事を知らせるんだ。

平汰 わかった。

信さん よし、行くぞ。

村人たちの声 おお。

五六郎 くっそう、この舟が川下に流れたら村が大事になるぞ。

シズ お前さん！

お美緒 五六郎。

五六郎 みんな、そっちの方に杭を5・6本打ってくれ。この杭じゃもたねえ。

シズ わかったよ。さあ、みんな！  
村人たち おお！

シズとお美緒とお悠。数人の村人と一緒に杭を打ち付ける。五六郎、一人の怪我人をみつけ声をかける。

五六郎 おい。佐吉じゃねえか、大丈夫か！

様子のおかしい佐吉。

五六郎 しっかりしろ。．．．おい！佐吉。おめえ、火薬のニオイがするな。

はっと五六郎から離れる佐吉。シズ、その様子をみて。

シズ 佐吉！あんたまさか！

佐吉、やおらひざまついで。

佐吉 五六郎！すまねえ。．．．オラ、とんでもねえことしちゃった。

五六郎 なんだと！じゃあ、こりゃあ、おめえの仕業か！

いつまでこんなこと続けるつもりだ。浜中島を削り取ったって、諏訪湖の水は少しも減りゃあしねえじゃねえか！

そんなこたあねえ。オレを信じろ！

このままじゃみんな潰れちまう。．．．弁天さまの祟りだよ。みんな死んじゃうんだ。

そこに白猫。佐吉を睨んで。

佐吉 おい、金をくれよ。言われた通りにしたんだ。なっ、金をくれ。

白猫 お前は少々喋りすぎだな。

白猫、佐吉を切り捨てる。

佐吉  
五六郎  
がああああ。……五六郎！  
佐吉！（白猫に）てめえ、何をしやがる。

そこに浪人風の侍が二人。杭を打っていたシズ、お美緒、お悠を囲む。村人たちは逃げてしまった。

シズ  
あんな！

五六郎  
おめえたちはいったい誰だ。

白猫  
農民出の分際で、過ぎたまねをするからこういうことになるのだ。何？

五六郎  
白猫  
このまま、工事がうまくいっては困るんだよ。キサマたちには何の恨みもないが、命、もらい受ける。  
冗談じゃねえ。

殺陣 五六郎、二人の侍を鋤でぶっ飛ばす。白猫にも立ち向かうがまったく歯が立たない。

白猫  
覚悟！

その時 縄がキリキリと高い音を出したかと思つと、杭の根元が「ビシッ」と折れてしまう。ゴゴゴツと唸りをあげる舟。

五六郎  
しまった。

五六郎、外れた縄を腕に巻き付け、（下手）新しく打った杭にしがみつく。

五六郎  
白猫  
舟を流しちまう訳にやあいかねえんだ。  
ふふふ、バカな男だ。舟と共に、激流に吞まれる。

白猫、五六郎を切るうとする。その時、どこから飛んで来たのか小

刀が白猫の腕を射ぬく。

白猫  
くそっ！

辺りを見回す白猫。

白猫  
何ヤツ！

島の上から白猫を睨みつける信さん。シズとお美緒は五六郎を囲み、体を張って守ろうとする。

信さん  
白猫  
まったく、しつこい野郎だぜ。  
ふん、遊び人風情が。

殺陣 信さんと白猫の戦い。暫く死闘が続く。一枚上の信さん、白猫の囀りに信さんの切っ先。

信さん  
悪ふざけは、ほどほどにしねえかい。

さつき、五六郎にぶっ飛ばされた二人の侍。起き上がって五六郎たちに刃を向ける。形勢逆転。信さんの刀がとまった。

白猫  
観念するんだな。

そのとき、お美緒が一人の刀をうばい、その侍を切る。

侍1  
うああああ。

信さんもそのスキにもう一人の侍を切る。

侍2  
うああああ。

白猫  
しまった。

白猫との死闘。信さんとお美緒、二人で白猫に挑む。睨み合う3人。ところが、そこに、高島城の家来が数人、鬼頭と成金屋が駆けつけてくる。

家来  
ええい、静まれ静まれ。高島藩家老、鬼頭村之介さままであるぞ。静まれ！

鬼頭、前へでてくる。沢山の役人が周りを囲む。

五六郎  
こちらら、それどころじゃねえんだ。

家来  
有賀村の伊藤五六郎だな。神妙にいたせ。

五六郎  
なんだと！

その方。浜中島を撤去するをいいことに、浜中島の弁財天を江戸藩中の商人に売りさばこうとしていたことは明白。盗まれた仏像の売買は御禁制と知っての行いか。

五六郎  
俺はそんなことあ・・・。

鬼頭  
ええい。口答えをするな。そこにある弁財天が立派な証拠。

五六郎  
これはいつとき、俺が預かっているもんで。

ウソをつけ。それをお前が売りさばこうとしたと、言っているヤツがいるんだ。

鬼頭  
おい、その者を連れて参れ。

連れて来られたのは、熊。随分いためつけられたのだろう。その後ろにオヨネもいる。震えるオヨネ。

熊  
五六郎。すまねえ。

お悠  
おじさん！

オヨネ  
お悠ちゃん！

五六郎  
くそお！理不尽なことしやがって。

鬼頭  
以上、申したことに相違ないな。

熊  
・・・はい。(泣きくずれる)

五六郎  
・・・熊。

鬼頭  
よし、皆の者、こやつらを引っ捕えよ。

家来たち  
はっ！

五六郎  
てめえら！

しかし、五六郎は縄を離そうとはしなかった。キリキリと締めつける縄。ごごごとと舟が軋む。絶対絶命。その時、どこからか笑い声。

信さん  
ふふふふ、あははははははは。

鬼頭  
うう、無礼もの、何がおかしい！

信さん  
これが笑わずにいられるか。

鬼頭  
なに？

キサマ、家老職にありながら、藩の許可した仕事を妨害したあげく、尊い村人の命を虫けらのように殺し、揚げ句の果てに、私財まで投げ打って諏訪の為に人力するこの五六郎を、罪人にしたて投獄するつもりか。どこまで性根の腐った古ダヌキだ。

鬼頭  
なにを！ええい無礼千万！コヤツを取り押さえろ！

家来  
はっ。

信さんを囲む家来たち。

信さん  
おめえら、オレの顔を見忘れたか。

はっと気づく家来たち。

家来1  
若殿！

鬼頭  
なっ何？

成金屋  
鬼頭さま、これはいったいどういことですか！

鬼頭  
なぜ若殿が、このようなところに。

成金屋

鬼頭

成金屋

鬼頭

信さん

鬼頭

家来3

鬼頭

家来

鬼頭

家来

どうするお積りですか。話しが違います。

お主が言い出したことだろう。お主が何とかせい！

そんな無茶な！

皆の者、此奴は若殿ではない。ただの浪人だ。

なに？

殿になりすますとは不届き千万。切り捨てい！。

しかし……。

かまわん、ワシの命令じゃ。

……。(躊躇する家来)

ええい、何をしておる。こやつらを切り捨てい！

……出来ませぬ。

家来、刀を納め逃げていく。

信さん

鬼頭

信さん

毒を食らわば、皿までか。

うつつうつつ、もはやこれまで。忠誠、覚悟！

フツ、とうとう本性を出しやがったな。

鬼頭と白描を相手に向き合う二人。鬼頭と忠誠。白描とお美緒の戦い。戦いながらセリフ。

お美緒

白描

シズ

五六郎

キサマ、なぜ母上を切った。

フツ、金のためよ。

えっ、それじゃあ、佳代さんは殺されたんだ。

なに！くっそお。なんてことを！(縄が締まる)うっ！

ごごごごつと舟が唸る。五六郎を襲う白描。それに立ち向かうお美緒。信さんも、鬼頭と向き合っ。四人の死闘。その内、上手に五六郎側、下手に鬼頭側と別れる。

信さん

十年前。お前も、私と佳代を引き離すのに加担しておったな。

鬼頭

信さん

鬼頭

お梶

鬼頭

信さん

ふっ、何もかも藩のため。

では、なぜこの期に及んで、佳代の命をうばった。

落ちぶれていたとはいえ、あの女が武家の血筋だからよ。

……なんだと。

まったく世話をやかせる。お主に跡目ができてはかなわんからな。

……きさま！

四人の死闘。合間、背を合せ鬼頭と白描を牽制する信さんとお美緒。

お前は記憶を失いながら、なぜお梶と名乗った。

お守りだよ。この中に入っていたんだ。

その中に？

またも入替りながら信さんとお美緒と戦う。合間、もう一度、二人は背を合せて。

信さん

お美緒

信さん

そのお守りの中に何が入っていた？

梶の葉だよ。梶の葉の絵だ。

ははは、そうか、梶の葉の絵か。それでお梶と名乗ったのか。

四人の死闘。今度は鬼頭と白描を真ん中に詰め寄り、忠誠とお美緒が両側から追いつめる。忠誠とお美緒、離れたまま。

お美緒、それは絵ではない。家紋だ。

家紋？

梶の葉は高島藩藩主 諏訪家の家紋だ。

どうしてそんなもんが？

殺陣 「信さんとお美緒」が「鬼頭と白描」と戦う。センターで鬼頭と白描を威嚇しながら。

信さん お美緒、なかなかの腕前になったな。  
お美緒 えっ？  
信さん なんだ、師匠の顔を忘れたか。  
お美緒 ……師匠？……父上。

信さん、二三度刀を合せると、鬼頭の刀を奪い、後ろ手にくい打ちのように刀を地面に刺す。身動きが取れなくなった鬼頭。

鬼頭 白猫、遠慮はいらん、切り捨てい！  
白猫 ああ。

なぜか様子が違う白猫。片手には浜中島の弁天を握っている。

白猫 ござかしい。

殺陣。

白猫 諏訪の民を救うだと。ふふふ、笑わせるな。

白猫、五六郎を狙う。ごごごごとと舟が軋む。苦痛に顔をゆがめる五六郎。

シズ おまえさん。死んでも縄を離すんじゃないよ。  
五六郎 ばかやろう！わかってらあ！

白猫、二人の刀を「ガンッ」と受け止めて。

古来より、諏訪の海は龍神の住まう聖域。お前らのような不埒者に何ができる。

信さん おい、胸に染みるな。(五六郎に)  
五六郎 ばかやろう。なに納得してんだ。

舟が軋む。力を入れる五六郎。五六郎をしっかりと抱き留めるシズ。  
白猫、もう一度二人の刀を「ガンッ」と受け止めて。

お美緒 オサトはいい子だったよ。

白猫 そこがその虫けらの死に場所だったまで。

信さん バカにつける薬はねえな。

お美緒 許さねえ！  
お美緒の刀が白猫を襲う。難なく受け止める白猫。

白猫 うぬぼれるな。貴様らにこの諏訪の行く末、見定めることなど出来

信さん はせぬ。  
それはどうかな。

三人の死闘。白猫、忠誠とお美緒を振り切って。

白猫 所詮この世は金と力。領民はさしずめその食いぶちだ。そうとも知らず、つまらぬ夢など見おって。虫けらならば、それなりの生き方があろうものを。

信さん それは、おめえ自身に言ってることか？  
白猫 フッ。

白猫、五六郎に刃を向け飛びかかる。

白猫 愚か者めが。

白猫、刀を振りかざして。

白猫 ものの道理を知らぬまま死ね。

白描 その時、弁天が唸りをあげる。「グワン」眩しい光が白描を襲う。  
うっ、なんだこれは！

白描、握っていた弁天を落とす。その光に引き寄せられるように五六郎、杭を放し、縄を持ったまま弁天を拾う。「ぎぎぎぎぎぎ」と唸りをあげる舟引き寄せられている。

五六郎 信念ってヤツかな。こっ、体が動いちまうんだよ。

ぎぎぎぎぎと舟が水に押し流される。引きずられる五六郎。五六郎、鋤を地面に振り降ろし動きをとめる。

五六郎 そうしろってな！

五六郎、それでも舟に引きずられる。

シズ あんた！

お美緒 五六郎！

シズとお美緒が五六郎にしがみつく。しかし、水の流れは強い。三人が引きずられる。「すすすすすす」そこに高島城の家来たち。それまで様子をうかがっていたが、窮地の五六郎に加勢する。

家来たち 加勢いたす。五六郎！（それぞれ叫ぶ）

何とか舟を繋ぎとめる。白描、かまわず刀を振りかざす。

白描 バカどもめが！

それをすんでのところで止める信さん。五六郎、舟に引きずられる。

白描と信さん、2・3度刀を交わす。そして、とうとう信さんの刃が白描の腹を刺しいぬく。

白描 うっ！

人に卑しいも糞もねえ。もし、そんなもんあるとすれば、おめえらのような力と欲に自惚れたヤツをいうんだ。（さらに腹をえぐる）

白描 うぐっ。

信さんすかさず袈裟懸けに白描を切り裂く。白描の最後、あざ笑うかのような形相。白猫、諏訪湖に消える。

鬼頭 たっ、たわけ！

すでに白描の姿はない。窮地に立たされる鬼頭。

信さん 鬼頭村之介。もはやお主の立つ瀬はない。

鬼頭 なに！  
追って沙汰を出す。（家来にむかって）誰かおる。

信さん はっ。  
此奴を引っ立てい！

家来 はっ。  
やめろ！おまえら。ワシを誰だところこえる。ええい、放せ。放せというに。

鬼頭 お美緒、無言で鬼頭に近づき殴る。家来に連れていかれる。

お美緒とお悠、信さんにすがりつく。信さんの胸を二三度たたき、泣き崩れるお美緒。

信さん 二人とも、大きくなった。長い間、不憫をかけた。すまん、すまん

な。

信さんは涙をこらえながら我が子をしっかりと抱きしめた。泣き伏すお美緒とお悠。いつの間にか舟の唸りも水の流れもなくなった。

シズ あんた、見てごらんよ。諏訪湖の水が引いてるよ。

五六郎

平汰

おまえら何やってんだ。

五六郎、諏訪湖を見つめて。

前に立ち、五六郎をかばう。動きがとまる村人たち。

五六郎

平汰

おめえら、クワや鋤の向いてる方向が違うだろう！

釜口の排水口が大きく口を開いたんだ。見ろ、さっきまでそこにあった諏訪湖の湖面があんなに遠くに。

シズ

シズ

村人、少し躊躇して。

五六郎

信さん

そうだよ。この人はね。川下に土を流さないように、こんなでっかい舟を作ったんだよ。自分のシンショウ売っぱらってこの舟を作ったんだよ。

皆で、難局を乗り越えたことに安堵する。その時、鋤やクワを持った百姓（十人くらい）が五六郎たちを取り囲む。

シズ

信さん

ああ、それに、たった今だって、舟が川下に流されないように、体を張って繋ぎとめたんだ。

五六郎

村人1

五六郎、ずっと頭を下げている。泣いているのか肩が震えている。

なんだいあんた達は。川下の村の連中だ。これだけの水が一気に流れ出しゃあ、村はひとたまりもなかっただろう。

シズ

平汰

わかってるよ。わかっちゃいるんだが。

信さん

五六郎

五六郎。安心しろ。川下の村は随分前から川の岸に土のうを何重にも積んで、大水に供えていたんだ。だから、村は何とか無事だ。誰も水に流されちゃいねえ。

五六郎

平汰

……本当か！

シズ

五六郎

ああ。

五六郎、村人たちの前に座り土下座をする。

五六郎

シズ

……よかった。

五六郎

信さん

じゃあ、何で……。

村人、クワや鋤を五六郎に向けて振り上げる。皆泣いている。

平汰

この何年か村は不作つづきで食うモノもろくにねえ。若い娘を下諏

訪宿へやって何とか食いつないでいるんだ。誰もおめえを憎んでいるんじゃない。……ただ、怒りを持っていく場所がねえんだよ。

誰も何も言えない。村人たち、腰が砕けて座り込む。そこに為一とオセツやってくる。

為一  
五六郎さん。

オセツ  
おい、いったい何があったんだ？

五六郎、天を睨みつける。

五六郎  
……オしたちは、この諏訪で生まれ、諏訪湖の水で産湯につかり、この地で取れた食べ物を食い、ここまで生きてきた。そのオしたちに……諏訪神さんよ！漫然とあんたらの道楽につき合えていくのかい。飢えて苦しみながら死んでいった仲間に、それが諏訪人の定めだとも言うてやれって言うのかい！

皆、五六郎を見る。

五六郎  
……まっぴらだな。諏訪神さんよ。龍神さんよ。オしたちが、いつもあんたらの言いなりになってると思ったら大間違いだ。人はなあ。時にはあんたらが思いもよらねえことをやらかすこともあるんだよ。

五六郎、鋤を見る。

五六郎  
生憎だけだよ。あんたは見逃してた。俺たちには、まだこれがあるってことをな。

五六郎、鋤を天につき出して。

五六郎  
人はなあ、だだっ広い荒地を耕すために、この一本の鋤を突き刺すことから始めるんだ。だから……。

五六郎、地面に鋤を突き刺す。

五六郎  
この一振りがある限り……俺たちは諦めねえ。

鋤をまた振り上げる。その時、あの弁天が光り出す。

五六郎  
この諏訪を見捨てやしねえ。俺たちの手で作るんだ。鋤を立てた分だけ、明日が見えてくらあ。（鋤を突き刺す）なあ、おメエたちにも見えねえか！

五六郎の一振り。それは、諏訪の明日を見据える大きな一振りだった。

シズ  
……お前さん！

お美緒  
お悠。  
うん。

為一  
オセツ、俺たちもやろう。  
ああ。

村人が一人、また一人作業に参加する。「よいさ」の音がだんだん高まる。いつしか太鼓の「ドン」「ドン」という音。まもなく、辺りが、ザワザワゴウゴウと地鳴りの音がする。驚く人々。

お美緒  
あの音は何？

お悠  
風？それとも地響き？

お美緒とお悠。小高い丘に登ると。

お美緒 五六郎。見て、すごい人だからだよ。  
お悠 みんな集まってくれたんだ。すごい、すごい人だよ。  
お美緒 人で地面が揺れているよ、五六郎！

五六郎 シズ、見る。すげえ人だからだ。

シズ ああ、見てるよ。あんた、すごいね。

五六郎 山下の連中も川下の連中も、ホラ見ろ！漁師連中まで……とうとう立ち上がってくれたんだ。

シズ お前さん。

信さん はははは、とうとうお前の阿呆が伝染したな。

五六郎 なんだよそりゃ？

信さん 人の思いは人を引き寄せ、その勢いは村を飲み込み、いつしか邦をも動かす。……とうとう諏訪が動いたんだ。

シズ まるで、御柱を見ているようだね。

信さん まったくだ。

平汰、信じられないという表情で。

平汰 おい！金沢や神戸の旗が見えるぞ。

五六郎 八ヶ岳の方からも来てくれたのか。ありがてえ。  
信さん どのようにして東の連中を集めたのだ。

為一とオセツ、顔を見合わせて。

為一 さあ、どうしてですかねえ。

オセツ ねえ。

興奮した五六郎、鋤を片手に振り上げて。

五六郎 (シズに) こうしちやあいられねえ。おい、俺たちもいくぞ。

シズ ああ。

信さん よし、オレも行く。

五六郎 あんたはやめてくれ。あんたまで阿呆が伝染しちや、たまったもんじゃねえ。

信さん はははは、わかったよ。

信さん 忠誠になつて

忠誠 五六郎！ワシからも頼む、この諏訪を救ってみよ！

五六郎 そうこなくっちゃ！

五六郎、集まった沢山の人々に呼びかけるように。

五六郎 よおし、おめえら！白いまんまを食わしてやるからな。おめえらみんな、腹いっぱい食わしてやるからな。

全員 おおおおおっ！

「よいさ」のかけ声と太鼓の音。人々のざわめきは地響きのように諏訪湖にこだました。

二幕（エピローグ） 小高い丘

もくもくと絵を描く老人の姿。老人は絵を描きあげ、満足げに旅支度を始めた。

その姿をじっと見つめている信さん。

信さん  
もう、お立ちですか？

あなた様でしたか。何だかずっと見られているような気がしていました。

北齋  
とうとう、浜中島は諏訪湖の湖面から消えましたな。

信さん  
それだけではない。新たに六町歩もの新田が生まれただ。

北齋  
ああ、まったく大したものであった。

北齋  
さて、私は江戸に帰ります。この春には出版しなくてはならない本がありますな。

信さん  
ほう、それはいったいどんな書物ですか。

北齋  
いやいや、書物なんて立派な物ではありませんよ。漫画です。単なる道楽です。

信さん  
ご謙遜を。で、その題名は？

北齋  
はあ、お恥ずかしながら、「富獄三十六景」と申しまして。もともと作品はもう完成しておりましたが、富士の裏側も加えてみたくなりましてな。それが、信州諏訪湖です。

信さん  
信州諏訪湖。

北齋  
失われた物の美しさともいいましょか。そこに諏訪人の生き様を感じました。

信さん  
なるほど、それは楽しみだ。

北齋  
それではお元気で。

信さん  
また気が向いたらおいでください。

北齋  
ははは、何しろもう年ですからね。約束はできませんが。

為一  
先生、そろそろ参りましょか。

北齋  
ああ。

北齋は為一とは歩きだした。そこにオセツ、旅支度で為一の元に向かう。その後を綺麗に着飾ったお梶とお美緒が追いかける。その後にお悠。

お美緒  
オセツ！

オセツ  
・・・。

お美緒  
元気でな。

オセツ  
お梶も・・・お美緒さまも元気で。

お美緒  
見つめ合つお美緒とオセツ。

オセツ  
オセツ、忘れるな。・・・喜びを分かち合えば倍になる。分かち合える人がいればそれが幸せ・・・だな。

お美緒  
二人の脳裏にオサトの姿が浮かぶ。二人に託された別々の運命を背負つ。

お美緒  
（気丈に）為一さん。オセツをお願いします。

為一  
はい。その言葉、キモに命じます。

オセツ、為一と共に歩きだす。

信さんと北齋。見はるかす諏訪湖の彼方を見つめて。

信さん  
北齋先生。この諏訪はこれから、いかなる邦に変わらましょや。どんな苦難にも負けない強い邦になるでしょや。何しろとんでもない「阿呆」がおりますからな。

信さん  
北齋

阿呆ですか。  
はい。

深々と頭をさげる北齋。景色が変わる。その後ろから、村人たちも見送っている。北齋、見はるかす諏訪湖に目をやり。

songs

♪神の宿る いにしへの 命はぐくむ 水は  
永遠にたたえ 紺碧の その神秘をしずめる  
ここで生まれ ここに立ち その命かれるまで  
諏訪の海よ きこしめせ 永遠につづく 願いを

砕ける土 明日へと この一振りか 希望  
諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を  
希望の舟 永遠の みのりを この里わに  
諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

遠くに富士山、その手前に湖に浮かぶ高島城。そして何より先に目に飛び込む島ひとつ。その頂上には二本松が立ち。その根元に弁才天のホコラ。その島が弁天島とわかる。そしてその島の左となりにあるハズの浜中島の姿はなく、そこには満面と諏訪湖の水が波打っていた。

(富嶽三十六景 信州諏訪湖)

— 完 —

2008.5.12 J4BOX Chifuyu Kobayashi